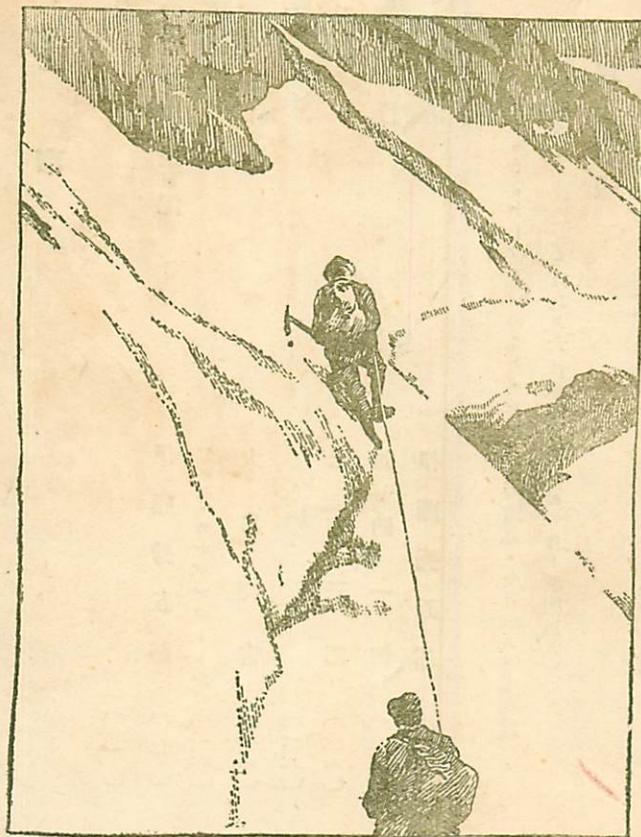


山とスキー

神威嶽

△1600

第四十九號



札幌山とスキーの會發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號九十四第

記事

譯章

三月の黒岳登山小屋日記

Skinnacht

峠 (承前)

旅 (詩)

瑞西便り

山詩抄

山と日常生活

彙報抄録

〔アンドリユー・アージュインのこと・レルヒ氏の消息・全日本スキー聯盟
會長の決定・改造せられたる大日本体育協會とスキー聯明加入〕

寫眞版

黒岳登山小屋より見たる烏帽子岳
黒岳登山小屋より見たる白雲岳

和辻 廣樹
和辻 廣樹

〔一〕

〔二〕

〔一五〕

〔一六〕

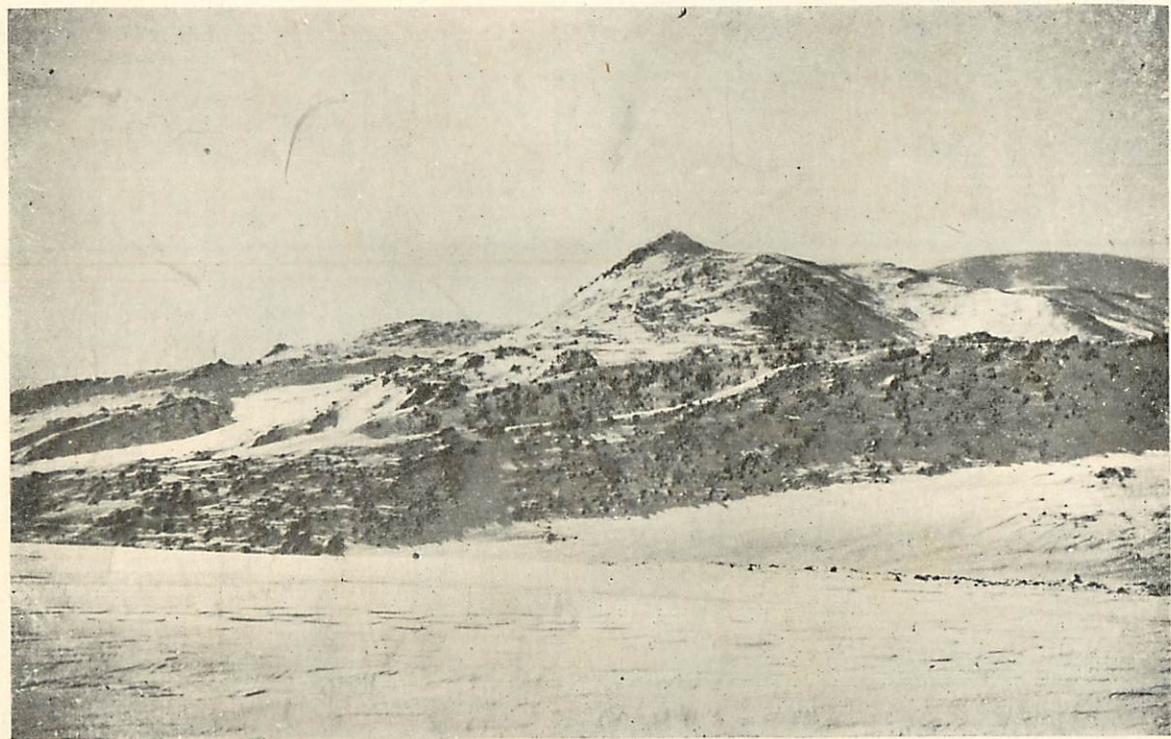
〔二五〕

〔二六〕

〔三二〕

〔三五〕

大正十四年五月發行



岳子帽鳥るた見りよ屋小山登岳黒

山々が自分等に與へて呉れるその至上のものと、スキージングが自分等に提供せんとするその至上のものとを共に得ようとするものは、自分の背にすべての用具品を背負ひつゝ谷から谷へと峠を越えて全く自由に、思ふままにさまざまのことをなさねばならない。そしてそれに従つて彼は常に *mountain* な接空線——それが藏する秘密はたゞ地圖の上からのみ想像することの出来る——を眼にして、そこにまで谷を溯る緩やかな長時間の登行を愛する様になるであらう。また彼はクラブ・ハットから寂しい山村へと越えつゝ簡易な原始的な生活をつゞけることを好むやうになるであらう。そしてホテルへの歸着に對して野卑な比小法を用ゆる代りに、何等の煩はしさのない高い山上のハットやシャレーにワインの一杯をあふりつゝ彼は快よくその一日の費用を節約することが出来るのである。そしてまた彼がそのアルプスに對しての想ひ出は、その懸望した時快よく彼に食物と屋根とを與へて呉れた路傍のあるシャレーのその燻り汚れた棟木の下に送つた永い冬の夕べは、そのみしらぬ人々の深き好意と共にある深い感懷を以つて固く結ばれてあることであらう。

—Arnold Lunn.—

三月の黒岳登山小屋日記

伊藤 秀五郎

小屋と準備

一 昨年夏、北海道山岳會に依つて黒岳と旭岳の登山道路が開鑿されて、登山小屋設置の計畫をきいてから一年、漸く昨年の八月旭岳姿見池と黒岳凌雲澤寄に小屋が完成された。黒岳の方は、三角點から東に約七町畔に沿つて廻つた平にある。此等の登山小屋を中心としてのスキー登山の計畫が僕等の仲間の間に持ち出されたのは、已に昨年一月頃からであつた。そして小屋が完成される迄直ぐ、仲間の者が實地に見聞して、何れも冬季の使用にも便利である様には全々作られてなかつたが、その位置や大いさや感じ等に依つて、昨年の十二月下旬から一月の初めにかけて、黒岳の小屋に行くことに決めた。九月の末、ストーブ・薪・炭・米・味噌・食鹽・砂糖・野菜・米國製石油ランプ・石油・蠟燭・鍋・レード・藁靴など、何時空身で飛び込んでも兎も角一週間は暮せるだけの食料、燃料その他を上げに行つた。多分小屋はすっかり雪で埋つて了ふだらうから、黒岳の下から二間ばかりの丸太を切つて擔いでいつて、目標にすっかり屋根にしばりつけて、天窓は直ぐ外からはづして潜り込める様にしておいた。その後も人夫が一二度登つて、戸口の破損の修理などしてくれた。

此度の一行は、小森、宮澤、佐々木、須藤、高杉、田中、和辻と自分の八人であつたが、十二月の豫定では、この外に阿部、赤松、藤江、田口、山口を加へた十二人であつた。それが藤江の不幸で三月に延びて了つて、三月になるに阿部は滿洲へ旅行するし、赤松、田口、山口は急に行けなくなつて、新に和辻を加へた八人で行くことになつた。人夫は層雲別

から二人連れて行つた。

中央高地の冬季の状態は、今まで殆んど知られてゐなかつた。唯數年前、逝つた板倉君などによつて、旭岳、黒岳とが各一回單獨に登山されたのみであつた。しかし昨年五月、僕等が石狩岳へ行つた時に、忠別岳附近で経験した烈しい吹雪から推察しても、冬の此の邊の吹雪が如何なる程度のものであるかは想像するに難くなかつた。僕等は實に周到な注意をもつて、準備を怠らなかつた。そして幾度も打合せ會が開れた。しかしその會合の度毎に、僕等はいつも激しい興奮の感情を禁じ得なかつた。また殆んど半ばまで燃料に依つて占められてゐる小屋の收容力の極限まで、一行の人数を最初から許した最も主なる原因は、僕等が冬山に慣れるべく、最もよき機會であると思つたからであつた。防寒寢具としては、馴鹿のシユラーフサツク、上衣、犬の皮のズボン、毛布等を用ひた。

日 記

三月二十四日（上川——層雲別温泉）終日雪

IとIIとは昨日から上川に来てゐて、毛皮類を先に温泉まで送つた。昨日は數日間の吹雪のあとの快晴で、ヌタツクの連峯が光つてゐるが、今日は殆んど姿を現はさない。それでも良雪をよろこびながら、今朝上川に着いたあこの連中と一緒になつて、十一時頃温泉に向つて滑り出した。リュックは重いので、馬糞で温泉まで運ぶ。それでも五里のだから上りはかなり僕等を疲らした。温泉については夕暮の六時近かつた。

三月二十五日（温泉——一三〇米突——温泉）終日雪降る

温泉を出たのは朝の八時であつた。黒岳の山頂まで、夏路の通する狭い尾根をぐんぐん登るのである。此の邊り、石狩川の兩岸は何處も斷崖の連続で、此より外に登る處はないのである。登りにかゝると、甜菜糖の様な雪が随分僕等を苦しめた。直ぐ流れて了ふので先頭は非常に苦しい。べたべたとスキーに着いて丸太棒の様になつて了ふ、軟雪もいけないが、此の様な雪はなほ悪い。二月夕張岳へ行つた時には、雪が少い上に此んな質だったので、一番いゝコースは斷念するより外なかつた。

一ノ平に出たのは十一時半。それに雪が少しも締つてゐないので、輪漕の人夫達はひどく遅れる。

一ノ坂の上が午後の一時三十分。今日はどうしても小屋までは行けないのだから、行ける處まで行つて荷物を置いてくる事にする。四時に二ノ坂上に着いて、殆んど凡てを二つのシュラークサックにつめて木の幹にしぼりつけて、リュックを軽くして成るべく上りのシユブルを崩さない様に下つた。一ノ坂では夏路を十間ばかりスキーを脱いだ。上りには一寸右に寄つた處を上つたので、例の雪に苦しめられて、スキーやリュックをザイルで引張り上げてかなり時間を費したが夏路どうり上下すれば樂である。しかし兎も角一三〇〇米までは、スキーローテとしては非常に悪い。下りにも勿論ボーゲンなど描けない。キツクターンと横滑りの連続である。温泉に歸つたのは五時三十分である。

三月二十六日（温泉——黒岳——登山小屋）曇

温泉發午前六時。

ラツセルの必要はなく、リュックは軽いから頼る早い。

一ノ平七時。一ノ坂ではやはりスキーを脱いだ。時々雲が切れて青空が輝く。對岸の岩崩のところを、遠雷の響をたてゝ雪が落ちる。昨日荷物を置いた所へは八時三十分に着いた。

こゝから所謂二十丁目までは、ゆるい傾斜の尾根傳ひであるが、毛皮類の外は殆んど凡て自分達で背負つてゐるのでかなり應へる。それでも僕等は十一時に二十丁目にいた。人夫達は膝を没する新雪に苦しんでずつと遅れる。こゝから頂上までは二十度から四十度位を往來する傾斜の斜面の一登りである。白樺ばかりになる。こゝは實にいゝ斜面である。人夫を待つ間滑つて遊ぶ。それに雪がいゝから、白樺の疎林をぬつて、思ふ様なボーゲンのシユブルが描ける。氷ならなほいゝ場所だ。

三時までに黒岳の頂上につけばいゝと思つた。若しどうしても小屋が掘り出せない様だつたら、直ぐ引き返せば、温泉まではラテルネを用ひなくて済む。それに天候は險惡ではなかつた。吹雪かれても、地形は複雑してゐないから、黒岳から温泉までの下りは大丈夫だと思つた。中食をゆつくりとつて登り始めたのは正午だつた。しかし人夫達は荷が重く

ては遅れるので毛皮類の外は凡てこゝに置かした。

漸く白樺の盡くるあたりで、スキーを克蘭ボンに換へスキーを擔いだ。未だクルステは形成せられず、スキーを脱げば雪は膝を没する深さであつたが、傾斜はやうやく度を加へてきて、リュックが重いので、若し流されれば努力の上で大きな損失であると思つたからである。それに若しかすると頂上近くはクルステになつてゐないとも限らない。二時頃であつた。

先頭になつて十歩を進むともう呼吸が激しくなる。そうして僕等はラツセルを交替しながら、もう頭の先に見えてゐる頂めがけて登つていつた。雪はこのまゝ均しく續いて、三時十分僕等は黒岳の頂にたつた。

漸く山頂にたつた時、緊張が極度に達したのか、或は極度の緊張が破れたのか、泪が胸の奥深く込み上げて來てどうしても押へきれなかつた。それはたしかに一つの大きなギツフエル・グリユツクには相違なかつた。しかしその時、快哉を叫ぶには心は餘りに重苦しく、悠々とバイフエを薫らすには、頂の風は餘りにも烈しかつた。僕等は黙つて手を握り合つた。

小屋は屋根まで雪に埋れてゐて、先の折れ飛んだ目標の丸太だけが六尺ばかり立つてゐる。早速天窓を掘ると直ぐはづれて内には入つてみるゝ雪は殆んどは入つてゐない。もう大丈夫だ。みるゝ風が次第に風いで、雲の切目から蒼空が輝いてゐる。目標の丸太にしばりつけた赤旗がひらひら靡いてゐる。晴やかな氣分が漂ふ。人夫達がやつてくる。早速ランプをつけて炭火を起す、戸口を掘り出す、ストーブをつける。湯が沸く、米が煮える。皆疲れてゐるので雑然とした屋内に藁を敷いて、馴鹿にもぐり込む。皮のズボンでストーブの圍に轉るものもある。炭酸瓦斯の中毒の爲か、しきりに頭痛がする。寒暖計はマイナス十八度を指してゐた。

三月二十七日 (小屋)もあける朝快晴後終日吹雪く

起きると依然として頭が痛む。小屋を出て見るとすっかり晴れ渡つてゐる。北鎮から白雲、烏帽子と朝日に輝いてゐるニセカウシユツベの鋭陵が目を引く。

九時頃から吹雪出して終日止まない。一同元氣なくなつて、僅かに窓を掘り、室内を整理する。少し體を動すと動悸が

高まる。折角開いた鶏も、昨年から上げておいた金時豆の砂糖煮も、ろくろく喉を通らない。大分○○○の中毒であらう窓や戸口を開け放して寝ると、幾分心持がよくなつて来た。

A.M. 7—11°F. P.M. 1—12°F.

バロメーターは狂つて了つて、いつも760mmを示してゐる。

三月二十八日（小屋）吹雪

A.M. 5—8°F.

窓が西向にある爲雪が盛んに吹き込む。風向がいつも北西であるからである。しかし皆元氣を回復した。

九時、荷物をとりに二十丁目まで人夫をやる。Iが黒岳まで一緒に行つてくる。風は依然として頗る強い。狂風は雪面を這つて縦横無盡に暴れ狂ふ。狂ふては雪の飛礫を烈しく吹き巻くる。

十一時皆黒岳へ行つてみる。

午後一時人夫歸へる。

夜に入つてもまだ吹き止まぬ。

三月二十九日（小屋——凌雲岳——小屋）吹雪後晴

朝、戸口の處で寒暖計は—6.0を指してゐる。

風あれど天候回復の見込あり。戸口雪に埋れ、烟突の窓より出て穴を掘る。

人夫の一人が温泉へ歸へるので、葉書をたのむ。

外へ出てみる名も知れない鳥が二羽三羽ひらひら〜と岩蔭に舞つてゐる。

午後一時風漸く止む。雪靜かに降る。

二時十五分、I、K、M、S、T、W凌雲岳へ行く、小屋の附近はクルステになつてゐたので、スキーを用ひなかつたが、ビークにとりつくと雪が深くて苦しんだ。殆んど頂上までスキーを用ひ得たのにとくやしがる。三時二十分登頂。雲

霧の爲呎尺を辨せず。ピークの半まで降つた頃雪止み、霧晴れて四圍の山々が次第に姿を現し出した。四時全く晴れ渡る
あゝ此の吹雪の後の快晴を見よ。北鎮の裾から凌雲澤の澤頭へかけては、まるで氷河の様に夕陽に輝いてゐる。

小屋へ歸へつてくると、S.M.T.とが素晴しく大きな墜道を入口の處に作つた。

夕陽を浴びてスキーを小屋前にて遊ぶ。澤の方へ滑り込んでゆく友の影は小鳥の様だ。

Berg Heil! Berg Heil! 天候はもう十分定つた様だ。明日は早く北鎮に登ることにする。

今こゝ二千米の高原は

吹雪のあとの夕陽ゆづりに映えて

和かに 一日の終りを告げ様としてゐる

赫黒い都會の雰圍氣も

陰鬱な室房の濁つた空氣にも

はるか遠く距つた山頂いただの登山小屋ヒュッテにたつて

あゝほんとうに未來のらいふを想ふ一念で一杯だ。

見給へ

あの白銀シラネの峯々を連ねる澄明な

ヒンメル・リニーのこゝろよさ。

あゝ僕等の心の濕陰な

あのいやな影の影は何處へ吹き飛ばされて了つたのか、
そして一つの快適が心を帆走するではないか。

山々よ

おごそかに沈黙せる峯々よ、

このはけしいよろこびの感情をどうしよう、

そうだ、黎明と共に

お前達のその美しいはだへに

Berg Halli と刻みつけよう、

いつまでも僕等のこゝろの

もぬめんとたらしめるために。

三月三十日 (小屋停滞) 吹雪

朝起きてみると、以前にもまして烈しい吹雪ぢやないか。昨夕のあのなごやかさはどこへ飛んでるつて了つたのだらう。天地は唯晦冥暗黒の世界である。この天候の激變はどうだ。昨日大きなアルバイトの後出来上つた戸口の穴は影も形もなく埋つて了つた。

終日蟄居である。

午後から風少しく軟いだので再び戸口の穴を掘つて、ハヒ松で墜道を作つた。これならばもう、いくら吹雪いても大丈夫である。

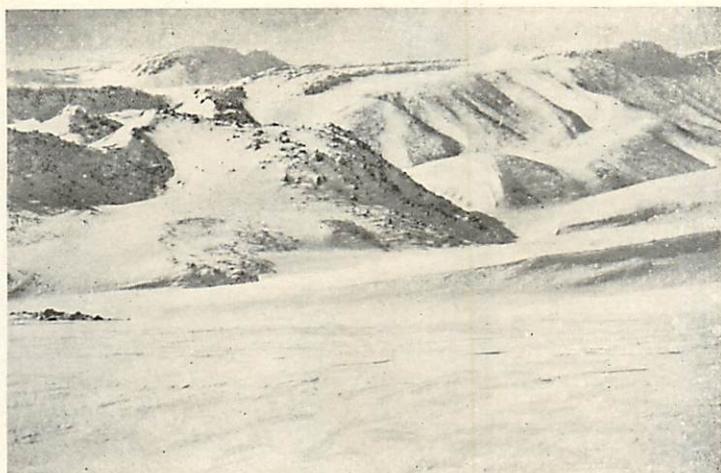
夕方になるとまた風力は加つた。風向は四方に廻つて定らない。

三月三十一日 (小屋蟄居) 吹雪夜晴

明くれば依然として烈しい吹雪、北西の疾風。

煙突が逆流して室中が煙で充ちて了ふ。煙突の穴掘で一日暮す。人間の燻製が出来る。齒だけ真白い怪物である。

S、S、T、Wの四人は明日どうしても歸へらなければならぬので仕度を始める。



黒岳登山小屋より見たる白雲岳

夕方より風漸く風ぎて、午後八時頃全く晴れ渡つた。
月、きらめく星、流星。

煙の爲傷めた眼を、雪を包んだ手拭でしばつて、シユラーフサックに潜り込んだが、明日の天候が氣にかゝつてなかなか寝つかれない。月明りに輝いた外の白銀の世界を想像してゐると、いつかしら明日の天候を祈る様な心持になつた。

PM 9—13°F

四月一日（小屋——北鎮岳——北海岳——白雲岳——小屋）快晴

あゝ永らくの蟄伏は報ひられた。

午前五時日出、—16°F. 片雲だになし。

八時、S、S、T、Wの四人は黒岳から温泉へ、I、K、M、Tの四人はスキーで北鎮へ出發した。スキーの角付も出来ない程のマーブル。クラストであつたが、北鎮の僕等の登る東斜面ではスキーを用ひられるかと思つた。しかしやはり僕等は北鎮の下でスキーを脱がなければならなかつた。その頃黒岳の山頂で四つの小さな黒い影がシユトツクを頭上に振つてゐる様にみえた。僕等がそれに應へると、つぎ／＼に影は向ふに消えていつた。九時であつた。

アイゼンに替へてから三十分で頂にたつた。テルモスのズツペでビスケットをとつた。

スキーデボット十時二十分、スキーをシユーマフレベツ澤寄に置き大噴火口を横切つた。火口の中は粉雪で膝を没する深さである。こう晴れて了ふとやつぱり春だ。額を玉の汗が流れ落ちる。

北海岳十一時二十分、白雲山頂十二時二十分。北見、天鹽、石狩、ニペソツの連山がたまらなく心をそゝる。すつかり延びて了つて、一時三十分をそろそろ出かける。

北海岳二時。火口の南斜面で一時間餘りものびて了つた。

スキーデボット四時。北鎮の下から小屋の下あたりまで、凌雲澤をスキーで滑る。傾いた日差が長い長い影を輝いた雪面に落す。風もなく、雲一つない。

四月二日（小屋——熊ノ岳——旭岳——北海岳——小屋）快晴

昨日にも増して穩かな天候である。今日は全くスキーを用ひない。

午前七時十分小屋出發。北嶺サツテル八時十五分。

熊岳九時十五分。比布から出るピウケナイ澤のスロープが誘惑する。

旭岳は雪の御殿である。登る者の小さい姿は、大きな砂糖鉢にころけた二つ三つの蟻を聯想させる。十時二十分三角點にたつ。姿見池はすっかり埋れてゐて、小屋は屋根さへ見えない。急に南西の風が強くなつて来て、雪を捲き上げる。熊岳との鞍部に下りて、リュックを開いてゐると、またもとの春のさかさかかへる。シャツ一枚でもいい位の暑さだ。時折そよぐ風が快い。氣温は零度である。

十一時三十分北海岳への屋根を傳ひ始める。時々烈しい風が雪を飛ばして吹き巻くる。北海岳一時、小屋二時。

小屋の屋根に寝轉ぶ。Tが、昨日二十丁目から人夫がもつて來た銃で小鳥を落す。

ほんごうなら、三時頃からそろそろと、ザイルとピツケルをもつてそこいら岩かけに氷を目がける筈なんだが、そんな蒼氷は何處にも見出せない。やつぱり高さが足りないのだらう。こう吹雪も止んで、氷もないんでは、板さんもえげないなどと冗談をいふ。

夕方から風が強くなつて雲が出て來たので、明日の天氣は難しいと思つてゐると、夜になつて粒雪が屋根を打つ音が聞えて來た。

四月三日（小屋）終日吹雪

一日中袋の中でごろごろしてゐた。誰かが飲だといふと黒いのがたかつてくる。鍋が空になるとまた牛になる。今度は誰かが豆だといふと、首だけのそつと出して一杯とくる。穴居時代の人間だつてこんなにかたがた動かないのはなかつたらう。それでも臭覺だけはあるとみえて、鳥を焼き始めると、今までこそつともしなかつたのがもくもく動き出す。そして白い齒だけがにたにた笑ふ。しかし誰かの言ひ草ぢやないが、男は面で賣るんぢやない。

四月四日 (小屋) 吹雪

窓がすっかり雪に埋れて、掘らなければならぬのに、なかなか出る者が無い。そのうちに、この頃益々大きくなつたTが敢然と身仕度を始める。外の者は、大きなスコップが一つしかないのをいい事にして、袋の中から歌つてゐる。

明日は此の小屋にも別れを告げるのかと思ふに、何となく名残惜しい。ヨードラを思ひ切り高く幾度も繰り返へした。

誰かが、もう十年もたつたら俺の顎にも手應へのある様な鬚が生へるだらうといふ。その時分どこか俺達の好きなヒュツテでゆつくり暮してみたいな。その小屋はベットになる中二階の方がいいな。その小屋はどこか険しい峯近くにあつて、夕方俺達はそこにたどりつく。そして片手に重い靴をぶらさけて、ラテルネを照らしながら、暗い室へ入つてゆくんだ、なんてめいめい勝手な想像をする。空想にしる、此な事を考へて興奮してゐるんだから、はたからみれば笑止なものに違ひない。

四月五日 (小屋) 黒岳——温泉——雲後晴

筵を巻いたり、残つた米などを罐につめたり、すつかり仕末して、九時半小屋を出る。風は凜いで、霧が濃い。

黒岳へ行つた時、霧が時々晴れて凌雲などが姿を現す。

十時三十分いよいよここにも別れを告げた。新雪で頂上からスキーをはいた。しかしリュックが重いから緊張する。キツクターンからボーゲンに移つた先頭はみるみる豆の様に小さくなつてゆく。此の長く長い斜面に三十分を費した。二十丁目まで下りると、雲が切れて紺碧の空が現れる。新雪が二尺も降つてゐる。熊の穴があつたので、どんどん下る。途中入夫が山鳥を一羽落してくれた。

休む度にお互の黒さを笑ふ。Kはきたない猿である。IとMのきたなさは何れももつかない。とも角どれも、人間世界では通用しない黒さである。

温泉についたのは三時であつた。

登山小屋を中心としてのスキー登路

此度の行では、小屋に着いた二十六日から二十九日まで毎日吹雪いてゐたので、一寸小屋の近くで滑つたのみで、多くスキーを用ひなかつたが、完全な粉雪であつたから恐らく北鎮の頂までスキーを用ひ得たであらう。三十一日の夜吹雪が鎮つた後では、已に一面マーブルクラストになつてゐて、スキーの使用は不可能であつた。兎も角常に風が烈しいからスキーの享樂は余り期待し得ない。ただ大噴火口の中は大抵の場合粉雪であるらしい。そして火口壁はよいスロープをなしてゐる。

小屋が已に一九〇〇米の處にあるのだから、最高峰の旭岳でも高さの差は僅か三百米程である。又地形がさ程複雑してゐないから登路といつても取り立てていふ程のこともない。

なほ五月に天幕を用ふれば、化雲、トムラウシの方までのばすことが出来る。嚴冬ならば、夜營に充分自信を持たなければならぬ。

層雲別温泉より小屋まで

温泉附近の石狩河畔は總て斷崖であるから、夏路の通ずる屋根の外に登路は見出せない。しかし日記にも書いた通り、一三〇〇米突まではスキーローテとして極めて悪い處である。こゝから二十丁目までの屋根傳ひは樂である。二十丁目から頂上までの急斜面は、クラストさへ形成せられないならばスキーを用ひ得る。頂上附近は傾斜がかなりひさいから、注意しなければならぬ。此の斜面の中頃からはシユタイグアイゼンを必用とする場合の方が多いだらう。又多少こもピツケルを必要とする程度の堅さの場合も想像し得る。

温泉から黒岳の山頂までは、リュックが軽くて一三〇〇米突まで前日のラツセルを利用し得るとしたら、六時間位で達し得る。リュックが重ければ二時間位を加算しておいていゝと思ふ。勿論吹雪の場合や、雪質が極めて不良で登行に困難を感じる場合等は例外である。

山頂から小屋までは風の爲に岩石が露出してゐるからスキーは用ひられない。しかし二十分とみれば充分である。小屋はすつかり埋つてゐるとしななければならぬ。

凌雲岳 粉雪なら頂上までスキーを用ひ得る。小屋から山頂まで一時間である。しかしクリーバーの用意は必要である。

北鎮岳 小屋から頂上まで二時間半あれば十分である。廣い東斜面では大きなジツクザツクを刻むこゝが出来来る。此の斜面には障物物は一つもないから雄大なスロロームを描くことが出来る。

旭岳 一月でも烈しい吹雪さへなければ一日で小屋から充分往復が出来来る。スキーを用ひるなら、北鎮の南屋根の肩から、大噴火口を真直に横切つて熊岳の鞍部に出るのが最も近い。雪の御殿である旭岳ではこの上ない享樂が出来来る歸へりには、北海岳への屋根傳ひもいゝ。

白雲岳 噴火口を横切るにしても、小屋の近くで澤を渡るにしても、北海岳から白雲への平な屋根を通らなければならぬ。ピークは岩石で蜂の巣の様であるから、勿論スキーは用ひられない。

それから烏帽子岳は幾重もの岩の屏風に距てられてゐるから、スキーの使用し得る範圍ではない。

小屋から歸つて

僕等は始め、よく小屋まで達し得るかどうか、小屋までは達し得るにしても、小屋がどんな状態にあるか、果して僕等の数日間の生活が保証され得るかどうか、それが第一の問題であつた。パイフェを衝へて熱いティーを啜りながら、ストーブの圍りに談笑の時間を費さう等とは思はなかつた。ましてあの様にまで容易に歩いて了ふとは少しも考へてゐなかつた。たゞへ小屋に潜り込めても、恐らくは烈しい吹雪の襲來にたまりかねて、忽々と温泉まで轉け下りるのぢあないかとさへ考へてゐた。僕等は今度、實に天候に恵まれたのであつた。

しかし僕等は、これを以つて少しも満足はしてゐない。寧ろある種の不満をさへ感じてゐるのである。山嶽の規模が餘

りにも小さいといふことに對して。

今度感じた不便の最大なるものは、小屋の設計が極めて悪いことであつた。その構造は、冬季のこまは少しも考慮されてゐない。それも昨年の夏出来上つたばかりのものなのに、どうしたことであらう。これからあの邊の冬季登山が發達すればする程、益々登山小屋の設備を必要とする。そして黒岳のそれは最も重要な位置を占むべき一つであるのに、あの様な不完全なものでは誠に心細い次第である。これから新しく建てられる小屋はもつと研究されなければならない。

あの邊の冬季の氣象に關して、僕等は數字に表れた明確な記録をみることは出来なかつたが、此度の經驗からして、次のことだけは推察出来ると思ふ。即ち十二月から三月に亘つて、快晴の日は極めて少い。雪が降らなくとも、風が吹けば忽ち雪を飛ばして殆んど進行を妨げて了ふ。新雪が降つて風に見舞れない間は粉雪であるが、概してスキーの享樂出来る様な雪の状態の永く續くことは稀である。小屋滞在約十日の間、最低氣温は華氏零下十八度であつた事實からみると、零度二十度以上に下ることは少いであらう。

それから今度僕等の歩いたところでは、雪崩の危険のある様な處は何處にも見出さなかつた。ただ下る時、温泉に近く一個處、表層雪崩を起してゐる處があつたが、それとても極めて小さなもので危険を及ぼす程度のものではない。

Skinacht

全く柔かな雪の砂丘の光つた山波が、自分の下から遠く擴がりつゞいてゐる。乳白色のやうな、そしてまた蒼白い月光は、朦朧とした平らな頂上の上を靜かに流れてゐる。水蒸氣の呼吸のやうに美しい、形なき、おだやかな光りが、眞白な肌着を纏つて睡つてゐる雪の斜面をば匍ひまはつてゐる。いま、そこ、この小さな谷の凹みが力強く、その陰影を印したと思つた瞬間、突如、純な幼兒の心にある不安な考へが起つた時のやうに——ひとつの輝かな光りが、無駄に努力して暗黒を這ひつゝ消えた。

自分は高い雪の上に休息し乍ら、靜かにこの雪の Wunder に心を奪はれてゐた。酷罰したやうな月光は、老ひやつれた峯々を照らし、乳を吸ふ幼兒の夢のやうな、おだやかな雪の波から波の上をとたゞよひ流れてゐる。

そして月光のその柔かな擴がりと共に、自分の心もまた擴がつて來た。そしてまた次に自分の心は月光と同じやうに全く形なきものになつた。境目なく動搖しつゝあるこの光りの世界は、自分の胸に波立たせるかのやうに、また自分自らを湧き出させるかのやうに、柔かに、音もなく自分を照してゐる。いま、自分の限りなき憧憬の心はリトミツシエなタクトを以つて自分の身體から飛び出して、さまよひ歩ひてゐる。それは、よりおだやかに、よりおだやかに、定かならぬ月光のなかを、すべての人間を避けるやうに、あちらこちらと、烟るやうな光りの、流れと共に自由に浮び遊んでゐる。一體この逃れ出でた自分の心は、常に彼等ベルグシユタイガーの目的である、あの純白な、道のない高き場所に達し得るのであらうか？

——ハンス・モルゲンターレル——

四月のはじめにしてなほその綱木とよぶ山間の小村には冬からもちこしてきた堆雪は村の道さへも深く蔽ふてゐた雪曇りといふやうなその朝の空合ひは、かなりたつたひこりでまだ雪が深いといふ檜原の峠を越えることを私に躊躇させた。雪道のつらさを私はそのまきすでにその村へくるまでに充分知つてゐた。けれど四日ほど前にひとり旅人がそこを越えて行つたから、まだその足痕は残つてゐようと、假りの旅宿を強ひてたのんだそのある村家の主は自分の意をはけましてくれた。自分は終ひにでかけることにした。村はづれまでは雪道は硬く踏まれて、歩きよかつた。しかし村からひと歩みをでるこ、もうたゞの雪の面であつた。そしてその峠路とおほしい道すじには、たつたひとり

大 島 亮 吉

の人の歩いた深い足痕がつゞいてゐた。それが四日前に越したといふある旅人の残して行つてくれた足痕の道なのだつた。

その檜原峠といふのは丁度羽前と岩城との國境になつてゐるので、その村と村との行き交ひはすこしもなく、また行政區劃も異なれば、郵便脚夫も通はない。雪の深いときの山路には、地圖もたよりすくないものだ。その先に越えたといふ見知らぬ旅人の残して行つた足痕こそ自分のほんとうに導かれ歩くところのものであつた。わたくしは旅人が旅人に與へるといふひとつの大きなめぐみを感じて、感謝するやうな氣持になつてからは、ひとつひとつその雪のなかに落ちこんで歩いてゐつた先なる旅人の足あとに、自

分の足もこれたがはずに踏んで行つた。そのことが、その先なる旅人へのいみぢくも、さゝやかな後來の旅人の儀禮とひとり心得たからである。先なる旅人の苦みつゝ踏んだその途あとを踏みかへしてゆくことは勿論勞に於てすくない。けれどわたくしにはその時そんな功利的な一點をのぞいても、なほ純とした感謝の念のあつたことをいまなほ思ひ返してさへ感ずることが出来る。それはたゞ旅するとき吾々の心の表面に浮んだひとつの淡いセンチメントにすぎなかつたものだらうか。否！ わたくしはこゝで敢へて私の心のナイーブなことも誇示するかのやうにおもはれるかも知れないが、それにしてもなほ且つ「否！」と答へる諸君よ！ 未だかゝる山の旅なれぬ、年若い旅人として、諸君がおなじくこのやうな雪の峠をひきりてこすこしたならば、おそらく諸君の誰れもが、わたくしのこれに似た心をもつにいたるであらうと、私は確と信ずる。まこと「一處に停滞する時水が腐るやうに、人が一處に據住するときその魂は籠ゆる。人は流轉の旅に於いてのみ、最も人間らしい自分の魂の素直さと、美點さを豊かに見出すことができる」のだ。そして「旅に於いてのみ人は非打算的な嬰兒のやうな、インノーセントな獸のやうな、小鳥のやうな自分の魂の影を見出すことができる」のだ。かゝるさゝやかな心事より發想して、おそらく芭蕉はあの寛かな、感謝と

慈しみに充ちた彼れの温かい人間的な心よりして、終ひには天地の寂びに親んで、永遠の世界に融合せんとする、かの廣大な旅人の心境を得るにいたつたのであらう。わたくしは彼れの「腰に寸鐵を不帶、襟に一囊を掛けて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし」と自ら云つてゐたその旅姿での孤獨な笠一かいの「羈旅邊土の行脚」のうちよりして得たる彼れの人生——彼れは人生もまた所詮は旅であると觀じた——についてのその觀照のある深さをおもはないわけにはゆかなかつた。

峠はその高さわづかに千五百米突ぐらひで、ともあつたらうが、けれぎ雪曇りの空はとうとう淡くふりしきる春の雪雨となつた。その頂をこえるあたり、わたくしは自らのその寂寥な影、孤獨に堪えない影をみた。その故にこそ、より先にゆきしかの旅人への謝念はつよく、そして襪んに心に湧きおこつたのであつた。くもれる空のもとに鈍く鉛色に光つてゐる檜原湖のその凍つた湖面が視野にまぢかくあらはれたまで、わたくしはそのやうなことをおもひ、或ひはもつとすゝんでは「路」そのものゝ生成の歴史などを考へつゝ雪道に苦しい足どりをほこびながら歩いた。

わたくしのそのとき歩いただゞひとりの人の足痕のみの路こそは、まさに路としての生成の歴史のほんとうにはじめのものであつたのだ。路は必要よりなりたち、そののち

の困難と勞苦とよりなる永い間の忍耐よりしてその生命を維持するのだ。ひとりの人の踏んだ足の印象に従つて、草をわけ、枝を拂ひ、木を伐りなどしつゝその後につゞく多くの人によつて踏み馴らされた一條の足跡の連續が即ち路となつたのだ。それから石を斫り、岩を裂き、川に架して、路はますます生ひ育つて來たのだ。それ故路は實に多くの人々の永い間のそれだけの困難と勞苦よりして、その生命をつゞけてゐるのである。だからして、まこゝの旅人はすべての路を心から感謝して歩むことであらうし、すべての人々に對しては最も廣い、温かな心の道づれであるだらう。わたくしの見知らぬかの先へ越したといふ旅人への直接な感謝の心は、實にまたそのひろやかな旅人の心の態度にまで擴けられていゝわけだ。

夕暮れに間近く、わたくしは雨にやはらんだ雪道に惱みつゝも、漸く檜原の村の湖畔にある小さな旅宿にたどりつくことができた。わたくしにはかの先なる旅人とは一体どんな人であらうかといふことが氣になつたので、試みにわたくしはその翌る日、旅宿のひとに四日ほぎ前に網木の村から峠をこしてきた旅の人とはどんな人だつたかきつねてみた。すると、それは越後からきたといふ、鉄や剃刀など小さな金物類を賣りあるくひりの旅商人だつたといふことであつた。そしてもうその旅商人は昨日會津へと下り

てゐつてしまつたといふことであつた。もしも會へたならば、わたくしはたしかに心からの御禮が言へたであらう。わたくしの見知らぬ、そしてまた逢ふともみわけることのできない旅の商人！私は今尙あなたに感謝してゐる！

×

そのときの記憶がなぜこんなに深く腦裡に刻まれてゐるのか、それは自分乍らわからない、と友は言ふ。

ある秋も半ば、それは十文字峠を樺山へこえたまきのことだつた。ちようど山々は美々しい錦繡の季節の衣裳をつけてゐた。白泰山のところまで栃本からのほつて來たとき、私は峠路で幼な兒を背におぶつた四十あまりの土地の人らしい男が、なにか紙を手にもつてうろくしてゐるのに行き會つた。彼れは私らを見て、ぼつぎしたやうに安堵の面持を浮べて、すぐさまこれから秩父大宮までの道程をたづねた。その顔には深い憂愁と不安の色がたゞよつてゐるのがすぐにもとめられた。私はは路程のことを話してやつた。きけば、その人は金峯の下、川端下の村のものでその幼兒が熱病にかゝつたので一刻を急いでいま醫者のところへかけるといふのだつた。川端下からよい醫者のゐるところへゆくには、千曲川沿ひに佐久の岩村田へでるよりも、この十文字をこして秩父大宮へゆく方が時間にして早いと教つて來たのだそうだ。けれどその人はまだ一度も

この峠をこしたことがないので、村の人から半紙に繪圖をかいて貰つてやつて來たのだつた。背中の病兒は熱にうなされてたえず低い呻きをあげてゐた。まさに峠は紅葉のま盛りのときだつた。父親は眞紅に色づいた楓の小枝を一本折りまつて、それを片手でたえず背中の兒の眼の前に振り翳してあやし乍ら、挨拶をのこして足早に曲折の多い峠の路を降つて行つた。その姿はすぐと路にかくれてしまつたけれどもその秋の曇り日の山路の水のやうにしんかんした静けさのなかに、次第に薄れてゆくあの病兒の低い呻きの聲のみはしばらくのあひだ私らの耳にのこつた。友だちはあのポイル・フォールの「バラッド、フランセエズ」のなかに歌はれたやうな軽やかな、ひとつの哀情の胸に湧きあがるのをおほへる言つた。こんな小さなことながら私にとつても、それは十文字峠とは離れがたい印象としてまた残つてゐるのである。

北海道の中央高地の北端をなしてゐる北見峠は、石狩の國と北見の國とのあひだを繋ぐ要路にあたる重要な交通路である。けれど私のそこを越えた時には、たゞ路ばかりがよくて、石狩の留邊志部から、北見の白瀧といふ開墾村の小村へとゆきつくまで、私等は終日その峠を越える旅人に會はなかつたほど、それは人通りのない、寂しい峠路だつ

た。そのうへ、この峠の道路はすっかり北地に流刑の囚人を使役して、彼れ等の血と汗とでできあがつてゐるのだなどいふことをきいてゐたので、なほさらその路は寂しくおもわれた。その時は石狩側の道路はその前の年の出水とかでかなり荒れてゐたが、北見側は暗いトドマツのなかに立派な道路がうちつゞいてゐた。

この峠の頂上近くにも官設の驛遞がひとつあつて、峠を越えてゆく旅人の便を計つてゐてくれる。その時ひこりの友だちは十八、自分はまだ二十をこえたばかりの若い二人の旅人のために、その驛遞にゐた中年の家婦はいそぐと卵などを茹てくれた。いまおもつても寂しさうなのは、その山のなかの孤獨な生活をたつたひさりでつくつてゐた家婦の顔だ。旅の眼で見たものはすべてうつくしい。そしてごくわづかなことにさへ鋭ひ感傷のはたらくのが、旅してゐるときの心のつねではあるけれども。

峠のゆるやかな頂近くの笹原には、枯ほうけたトドの樹幹などが白々として突つ立つてゐる、いかにも國境ひの峠らしい光景で、北見側に來てからは、チトカニウシの頂も濕つほく霧に蔽はれてしまつて、霧が多くなつてゐた。この濕つほい海霧の多いことが「北見」といふ國にはいつたことを深くおもはせた。

若い旅人の足なみはその朝の出發のときに於ては、輕々

として勇ましく、そしてその夕暮れのとまりの近くに於ては、いらだたくもはやすぎる。私等の姿はこの北土の、焼地農法の開墾のてはじめにある荒地のなかの新らしい小村や、馬鈴薯の花のわびしげに咲いた瘠せた耕地がうちつゞくあひだの幅びろい道路のうへをしきり、さいそいでゐた湧別川の川沿ひにあるといふ伐木業者などの集つてゐる小さな市街地をめざして、夏のしづかな夕暮れを、原野の雜草のなかで夏虫はころ／＼と啼いてゐた。それはまるで若い旅人にとつては、地の底からでも湧いてくるやうなさびしい聲だつた。

x

そのとき私の伴れとなつてゐたたつたひとりの山人は、越後の五味澤村のものであつた。その五味澤といふ村は朝日山群の越後側のいちばん奥にある村で、峠ひとつ越せばあの名の知られた原始的な村である三面へも行けるところだつた。その山人は名も忘れたが、四十ばかりの不思議な性格の男だつた。生眞面目で、黙つてゐる性質だが、なんだかその心には幻想を藏ひこんでゐるやうな風にも私にはおもへた。彼れは私と歩ひてゐる間に、よく狩人としての樵夫としての彼れの経験から、いろいろの鳥や獸の神秘的な習性について、樹のいろいろの伐り方や伐木法の傳統のことなどを方言まぢりで話しきかせてくれた。そして彼れ

はただ私が山を越えて庄内にゆくといふことのみに心を惹かれて、だれも村でゆきてのなかつたこの山越えの荷かつぎになつてやつて來たのだつた。庄内の平野！ 話にきいてゐたにぎやかな町々のこと。豊饒に耕された田野の廣大なつゞき。庄内！ おそらくはたゞ庄内といふところを見たらに彼れは私の伴れになつて來たのだらう。

けれどもそのときは天候は非常に悪くて、毎日雨にうちぬれ、寒さにふるへてゐた。まる六日間私は大朝日の山稜の大きな雪田のそばで、小さなテントを張つて天氣のあがるのを待つてゐたが、終ひに天候の恵みが私らにあたへられず、大鳥から庄内へでようとしてゐた考へもうちすてゝ、私は最上の平原に下りることにした。なぜならばそのときはもう私の都會へさかへらねばならない時日が迫つてゐたからであつた。山人は私を送つてゆくことになつた。

峠を三つばかりこさねば、最上川の平野へはそこからであることはできなかつた。けれどそのとき越した三つの峠は私にとつては決して舞臺なものではなかつた。

そのひとつは山毛樺峠といつた。山毛樺の林の高い樹幹が樹幹につゞく並列が名の通りその峠路には續いてゐた。徑はひどく荒れてゐた。けれど人のたび／＼通つて踏みつけた跡は歴然としてゐた。その峠はまつたく小さなふたつの山村のあひだをつゞけるごく地方的なものであつた。そ

れ故にこそ、それはそれ自身の特殊なる句はしさをもつてゐたのである。ニュアンスをもつてゐたのである。黙つたまゝ、私らはゆつくりした足なみで歩いてゐた。歩き乍ら、私はあるひとつのところに眼がとまつた。その徑の一端の山毛櫟の樹列には、恰度高さにして一丈五六尺ばかりのあたりに、二三本を置いて必ず樹幹におほきな鋭目がはいつてゐた。それがなんのためかは私にはわからなかつた。私は伴れの山人に早速きいてみた。するに彼れはすぐに、之れはこの峠が雪が積つたとき、村人が越す道しるべきなる目標めくせうだらうと答へた。朝日岳の山麓は我國では名高い深雪地である。そんなに深く雪の積つた冬から春のあひだでも、なほこの峠は村人によつて越えられるのである。たゞ樹の幹に刻みつけたわづかの目標をたよつてまでも、いつでも村と村とを通じてゐるその峠路、そこには人間の生活とその峠の路とはひたとくづついてゐる。

そのつぎの峠は地圖に名もつてゐない草原の小峠であつた。ゆるやかなその頂上の廣い斜面には、萱や蕨が繁り合つてゐて、山を越え、峠を越えてやつて來た私らが、その日のとまりを乞をうとおもひさだめてゐた萱野といふ小村が、そこからは見下ろせた。そこは青だゝみを數枚ばかり敷いたほどにみえる麓の小さい谷合ひの平地で、そのたつた三軒の村家からできてゐる小さな村は、そのぐるり

のわづかばかりの畑地の真中にしづかな人間生活の一小景をいとなんでゐた。それは哀傷を誘ふほどでもないといふ可愛らしい世界であつたらう。しかも私はその村の家の一軒で、そのやうな生活のうへの何らの壓迫もないところに住む純眞な人々にしてはじめてもつことのできるやうな、Hospitality といふ古風な、温かい心をもつて一夜を遇せられたのであつた。それは旅しての最も快い、何事にも換へ難い印象である。どんなにゆきこゝいた、親切な旅の宿よりももつとそれは旅人にはありがたい宿である。私にその小村のことが忘れられない。

そして三つ目の峠は、この山々の起伏した山合ひと平原との間をつなぐひとつの小さな峠だつた。莖ノ峰峠といふ名だつた。曲りまかりの多い急な路をのほつてその頂につくと、青い平原とそのあひだを光つて流れてゐる最上川の大きな姿がずつとみはたせた。私と私のよい伴れとなつてくれたその山人とが別れたのはその峠の頂上だつた。ひとりには急いで、間もなく都會の混雜の内に混りに走るもの。ひとりにはまた再び山深やまふかいなかを自分の村へとひとりでかへつてゆくもの。ふたりともおの／＼異なつたおもひで庄内にでられなかつたことを遺憾におもつてゐた。短い乍ら、心からの挨拶をとり交して二人は別れた。坂を下つてすこし行つて後をふりかへると、山人のまだ頂に立つてゐる

たすがたが静かなシルエツトになつてみえた。しばらく行つて、再びふりかへつたときには、その姿も見えなくなつてゐて、私はひたすら峠を下つて歸路を急いだ。また都市のなかの擾がしい住かにかへるために。

X

それは荒船の頂上高原の南端近くのところを越えて、上州の山里から信濃の山あひの小村へと通つてゐるひとつの小きな峠だつた。そして私のひとり腰を下してゐるといふそこは、その峠の頂近くの小徑のうへだつた。九月にはいつの間もないその日、それは初秋らしい情感がほのかに漂つてゐるやうな日だつた。

私は丁度自らがのほつて來た上州の側に向つて腰を下してゐたのだつた。高くもない峠ながら、私の眼まへには、私のこゝ一週間以上も前から歩きこえ、歩きこえてきた低い山々の幾重もの尾根なりも、そのあひだの幾つもの峠となつてゐるだるみも、あるひは奥秩父のまつ黒い高嶺つゞきの山影さへも、そしてまた次第に低夷してゆく山波のあひだからは廣い、廣い關東の平野のその鮮綠色の表面さへもが望まれた。

私は私がつた峠をこえ、峠をこえて歩いて來た甲斐、秩父、上州の各々の山よりの、山あひの、山なかの村々に於て、われ知らずのうちにそれらの主として農民階級の勞

働生産者の生活の點景をみるやうな多くの機會をもつことができた。私は小作農の地主に對する眞の不平をきいた。炭焼きからはその生活の苦しさをきかされた。乞ひ泊めて貰つたある山村の農家の主人には蘭の相場の安いこと、農作物の廉價なことを説いて、その生活の慘苦を示された。あるところでは、そんな山のなかにはめずらしい人生の廢顏をみた。そしてまたあるところでは平和さを通りこしての人生の沈滞をみた。

X

あの狭い甲斐の盆地にもすでに地主と小作人との問題があり、貧に泣く農民があり、はては豊作だといふ葡萄の棚で首をくゞつたといふ果樹園づくりの小百姓があつたのだ。そして私は鹽山のほとり、小作人の騒ぎ立つといふ村を通り過ぎた。終日早くから木を伐り、割り裂いて、それを炭に焼き、夕べには二里の山道をその一日の汗に疲れた身体で、毎日二表づゝきり重い俵を背負つてかへるやうなはげしい労働をたえずしてさへ尙ほ貧に追はれるといふ炭焼きの生活が、甲州の山村にあつたのだ。山林もあり、桑畑や田地ももつたそのうへ、なほ副業としての養鶏に繁忙暇のない家業を勵んでさへ生活に窮追してゐる中流農家が、上州の山より村にあつたのだ。

郭公がほんとうに森の隠者のやうに奥ぶかく啼いてゐる

山道の静かさを辿つてゐても、芝草山にうねくとしたなだらかな峠道をのほつてゐても、澤蟹の私の足音にかさかさ石のなかを這ひにけるやうな、小さな、細い澤つたひの荒れ路を徒渉りしつゝ歩ひてゐても、また足あたりの硬い街道を草鞋のあとから舞ひあがるその埃りと一緒に歩いてゐても、私にはこれらの私のぐるりをとりまく人生の諸相と社會の諸相とをうちみて以來、それらの社會のすがたについて、それらの人生のすがたに對して、そして更にふかく自らの人生についての想ひが、きれぎれはするが絶えず私の心頭に浮び消えした。あゝ、私にはもうあのたゞ單純な自然觀照のみをことゝして、年若く、他になにも想ふことなく旅のたのしさ、つらさをたのしんで歩ひた古る年まへのそのやうな旅心は消え去つたのだらうか？「さらば旅人よ、歩み去りし過ぎし日のわが美はしの旅人よ」と、私は今更感傷がましい詩人めいた言葉を弄して、私の過ぎた日のあの自らの旅姿をなつかしむべきだらうか？馬鹿な！おまへはたゞそのやうな安價な自然嘆美、微温な自然禮讚の感動の幼稚で稀薄な、無内容な「寂寥の享樂」に墮した旅心をもつて眞實の旅人の心さするか？勿論それも純性には富んでゐるが、それはチョコレート菓子のやうに甘い。あまりに自己逸樂的である。まことの旅の心とはもつと複雑なものゝ總和なのだ。旅の心にはもつと思想

的背景があつていゝ。もつと社會性があつていゝ。ひとりの旅であればあるほど、寂しければ寂しいほど、旅人は他の多くの旅人のことをおもひ、通りゆく路傍の人生に眼を見張り、耳をかたむけ、想ひをはせるのだ。所詮は大きなすべての人々を入れての人生を對象してゐる。かのへークのあのさまよひ歩きの旅の心には、その道づれへのおもひとより大なる人生への永遠の途をもつて終始してゐたではないか。芭蕉があつた俳行脚の生涯はたゞ自然の寂びそのものであつたといふが、その超脫的な境地に達するまでいかに彼れ自身の人生とそれをとりまく人生についておもつたことか。單なる自然觀照よりして彼れは天然の寂びに親むべく進んだのではなくして、人生への凝視から人生を寂滅相と觀することからしてそれは出でたのだつた。それ故にこそ彼れは最も廣い民家の道づれであつたのだ。人生への背負ひきれぬ想ひを背負つて旅立つときこそ、旅は旅としての本然の旅姿をとりかへすのだ。私はこう自らに言つてみた。私はこゝへ來てはじめてひとり旅人となつたやうな氣がした。

徑のきわに生ひ茂つた若いすゝきの穂波が、初秋のさはやかな風にわざめいて、くる秋の歌をうたつてゐるやうだつた。午後の光りはさつと雲間から望める山々の起伏、平野のうへに流れた。山髪は濃淡をみせた。そして平野はか

どやいた。夕立の通りすぎたあとの、はるかにみえるそのうち濡れた平野の海のような田野のかどやき。あゝ、その群馬と埼玉の平野。そこは、私のみて来たよりもまだもつとはけしい、地主が小作人を強搾し、小作人はまた組合をつくつてそれに相ひ争ふふいふ、ひとつの時代の病弊が巢喰つてゐる平野なのだ。私はそのいづれが是であり、いづれが非であるかを知らぬ。けれどもそれらはそのやうなる單なる階級闘争のごときもので解決はできないと思ふ。その病弊の根源はもつとより深く人心の奥に内在するものであらう。

私の心はいろ／＼の想ひに胸をよぎらしめられた。しかし、私はその平野のすべての人々に、すべての村々に、そしてこの地上のすべての人々のうへに、大いなる共有のものとの正しい、本然な地上の生活の春が訪づれきたるであらう未来の目を、いまは情熱こめて一日も早からんことをのぞんでゐる。そのために苦しまねばならないのは、小作人のみではない。地主のみではない。労働者のみではない。資本家のみではない。すべての人々がともに苦しまねばならないのだ。自分もまさにそのために苦しみ、努むべきだ木を伐るほがらかなもの音が、どこからかすぐ近くよりきこえて、遠い方にほろ／＼と山彦して融け消えてゐつた

私は立ち上つて峠を信州側へと下りるべく歩きだした。落葉松の林のなかの、あの踏む草鞋にぶくぶくといふ弾力を感じさせるやうな歩きよい山道——それは信州へ来てからはじめてあるものだ——や、湯宿のひこが、自ら薪を割つて沸かすといふ、あの溪あひの小さな源泉宿のことなど、私はこの峠道につゞく曾遊の道すじをたのしそに思ひ浮べてはみるが、しかし私の心はそこより近くの、私がかたたび訪れてゐるあの上信の國境になつてゐる、なだらかな山腹の廣い傾斜地にある牧場へととびたがつてゐた。その、いまはかくはしい香ひのするであらう、あの牧草の丘の頂きに孤座して、牝牛ののどかな鳴き聲をきき乍ら、私はもつと現實をはなれて私の胸に靜平をうたふやうにしてみたい。あのいつもそのなかに仔牛等がおとなしく乳を飲みつゝあそんでゐる牧柵によりかゝつて、すべてを忘れてまるで餘念なく自分の生活理想のことをおもつてみたい。また、あのシャレエづくりに似通つた牧場小屋の、その向ふには深いヴァレエや丘や水流がまるで素靄風にのぞめる窓椽に腰をかけつゝ、携へてきたエミール・ジャヴェルもよんでみたい。あるひはまた、牧場の背面にある落葉松の粗林のあひだや玉蜀黍畑のほとりを、ひとりでたのしく口笛を吹いてのあの夕暮れの散策がしてみたい。けれど、私

の心のなかにはそれらの平和な願望をかきみだすかのやうにして叫びでる、強い時代人の意識があつた。そんな安逸的な自己陶醉におちいつてゐることができないぞ、ミ叱りつけるやうなある焦燥な想ひがあつた。もつとつとめて、ひらくことを努力せねばならぬ大きな自分自身のものがあると思はれた。自ずと私にはかのウイリアム・トムソンのあの當時の社會に於ける一部階級の苦難を目撃し、社會の不正に想到するごとに、體質蒲柳情操多感の彼れが傷心制する能はず、遂ひにその病弱な全生涯を驅つて社會の正義と人類の福祉の「最大多量」を確保すべき理想社會の案出に没頭せるその生活のことなどが髣髴として想ひだされた讀みさして旅にでゝきたが、はやくかへつてまたトムソンのあの *Distribution of Wealth* を讀もうか。

そのやうに私は心をいろ／＼の想ひにうつし、路上にひらける風景にうつしては、峠を下つて内山峠の街道へと出で、更に街道を信濃へと少し戻つて、初谷しよが鑛泉の溪すじへまはいつた。

—をばり—

旅

日はあかり、
また陰りけり。

山あひの麥の青さの
しみじみと胸にしみけり、
ひとり峠たけの路をゆきけり。

—風・光・木の葉より—

瑞西便り

——エンゲルベルグスキー大會見物記——

松方三郎

或る夕方、私は山からの歸りがけにシエンク爺さんの仕事場の上の小道を下りて來た。もう日は落ちて人の顔もよく判らないのに、三四人の子供が、下の傾面でしきりに何かして居る。「今晚は」と挨拶をしてよく／＼見るに「シブルングごっこ」をして居るのだ。要するに雪で一寸したヒューゲルを造つて、上から小さな木切れを滑らす、そして其がシャンツエから飛んでアウフシブルングバーンに落ちる、すると、その度びに下の子供が「ドリー・ウン・ツワンチク」だとか「ザハツエーン」だとかグリーンデルヴァルド訛りで勿体らしくどなるのだ。而も其がひどく面白いものと見えて一區切り毎に木切の取合で、きつこ悶着を起す。私はつく／＼雪國の子供だなと感じ乍ら宿に歸つた。

實際私達は一寸、外を散歩しても到る所にシャベルで造つた急造シャンツエを見出す。何れ隣り近所の子供が語り合せて築いたものに相違ない。此の邊の子供の冬の唯一の楽しみはシブルングなのだ。そして學校から歸つて來るに夜暗くなるまで、日曜は朝から晩まで、引切無しに飛ぶのだ。——之は「ごっこ」ではない、本當の方のシブルングだ。——其に本當のシャンツエがグリーンデルヴァルドだけに二つもあるのは誠に羨ましい。一昨年のスウイス大會の爲に造つたメツテンベルグ、シャンツエは固い岩を壊してバーンを造へるのに一万フラン餘も金を喰つたと云ふ素晴らしい大物。其でも互人に云はせると、まだ手を入れたい所がある、但し其には更に一万フランの餘金が必要なのだ、と聞いては、此のスウイスでも、一つの完全なヒューゲルを造るのは一通りの苦勞でないと云ふ事が判る。

兎に角、日本で殆んどシブルングラウフと縁のなかつた私は、スウイスに入つてから、恐ろしく其が普及して居るのに驚くと同時に、非常な興味を持つ様になつてしまつた全く此處では上手下手は別として、ステムボーゲンやシユヅングと同じ程度にシブルングがスキーロイフアーと云ふ言葉の持つ一屬性となつて居る様に私には思はれる。そして競技會等で餘り猫も杓子も飛ぶのを見て居ると、或は自分も飛べやすまいかと飛んでもない幻覺をさへ起して來る何れにしても、此の環境が、私を驅つてエンゲルベルグの大會見物に追ひたてた重大な原因であつた。

二

「瑞西スキー大競技會」はS、S、V（瑞西、スキー聯合會）の手によつて毎年一回行はれるインターナショナルの大會であつて、其によつて其の年の瑞西、スキー選手權が定められるのである。今年は其がエンゲルベルグで二月の七、八日の二日に亘つて行はれた。

此處から直徑にして四十基もないのに汽車で廻ると仲々複雑した、間ののびた道中をしなければならぬ。併し私は丁度、あの今更説明を要しない先生兼フューラーのブラザンドがグリーンデルヴァルドのスキークラブからシブル

ングの選手として行くと云ふので之幸ひも隨行する事にした。

朝の十一時に汽車に乗つて、漸くルツェルンから汽船に乗つたのが夕方の六時過ぎ、全く長い、併し初めての私には愉快な旅であつた。船に乗るさもう其處はエンゲルベルグの延長だ。何れ御客はスキー大會の選手か見物人に異ひない。男も女もルユックサツクを擔いで、胸に各々のクラブの徽章をつけて横行して居る。船がシタンシタードにつくと大勢の船客、皆が自分のスキーを擔いで棧橋を渡るのだから仲々壯觀である。其處から電車に乗つて夜の九時過ぎに漸くの思ひでエンゲルベルグに着いた。電車を下りるさもう完全にスボルトフェストの勢力範圍。軒と云ふ軒には瑞西の國旗や赤白の幟がさがり、其をアーク燈があざやかに照して居る。おまけにチラ／＼粉の様な雪さへ降つて居る。其の日の長距離の結果のプリントが方々にはつてあるかと思へば、胸に大會の入場券のリボンをつけたノールウエー服や水色の軍服が群をなして歩いて行く。

併し私は何はともあれ定められた宿をさがした。各クラブから來て居る選手は勿論、クラブの會員、そして私の様な赤の他人の見物でも豫め頼みさへすれば大會の宿舎掛の委員が宿を世話して呉れる。日本ならばさし當り、何處からともなく温泉の香でもして來て雪に半分埋つた宿屋のト

ンネルみたいな入口へ入つて行く所なのだが、相憎此處は皆堂々たるホテルばかり、おまけに私の宿はグランド・ホテルと來ては甚だ始末が悪い。玄關からサロンに入つて行くくとスモーキングの紳士や夏裝束をつけた淑女——誰かが云つたつけ、だから西洋では暖房に御金がかかるんだつて——がウヨ／＼居る。尤もどうせこんな殿様達はスキーをはかせれば千米突も上れやしない。そして男のくせに坂の上までスキーを擔がせて、上ではかせてもらつて、手をもつてもらつて滑つて半日十フランの二十フランのと拂つて居る連中、一口に云へば毎晩ダンスをやる片手間にスキーをやらうと云ふ御客なのだから大した事はない。併し私は王様が貧民窟に入つた様な居心地悪さを感じない譯に行かなかつた。其で部屋にリュックザックを下すさいきなり又夜の町に出てしまつた。そして晩くまで或るレストランで紅茶をのみ乍らノールウエー服や水色の軍服が手風琴に合せて踊るのを眺めて居た。此處ならば黒い顔もスキー服も、鉈を打つた靴も立派に通用するのだ。

三

二月八日は素晴らしい上天気だつた。エンゲルベルグをかこむ山々の新雪に蔽はれた姿の美しい事。其は誠にエンゲ

ルベルグ(天使の山)の名に相應しい。一番高いテイトウリスでも三千米をひきく越しては居ない。そしてテイトウリスからぐるつと見廻した氣分が餘程上高地から見た穂高に似て居ると思つた。

午前中は斥候競走とでも云はふか軍隊の長距離競走 (Military or Patroni Heide) があつた。各地から來た四人組の兵隊さんの競走である。併し、瑞西の軍隊は制度が日本と違ふから、何も赤煉瓦の四角張つた建物の中からしやちこばつて來てるのではなくて、普段着を軍服にかへて自分々々の谷から出て來て居るのだから水色の軍服をぬけばスウエッターを着て居るのも居やうし、レストランに行けば手風琴に合せて踊りもする。

此の競走は可成りの段違ひでツエルマツト組の四人の勝利に歸した。此の組は今度で三度續けてカップをまつた事になる。そして此の組は一九二三年六月、ユングフラウーグリムゼル競走に五時間二十分と云ふレコードで一着を占め、一九二四年シャモニーのオリムピック大會では瑞西の軍隊の代表として一着を占めた有名な組である。

軍隊の競走の終つたのが午近く、私は大急ぎでスキー關係の圖書展覽會を眺めに行つた。「日本にも雪が降るか」「日本でもスキーをやるか」と云ふ質問は此の國に來てから何度も受けたけれ共、此處でも亦同じ質問をされた。私はい

つもの様に日本は南北に長いから雪の降る處もあれば降らない所もある。そして北の方に行けば猛烈にいゝ雪に恵まれた地方があるんだと云つたら、ひどく驚いて居た。一通り見物して宿に歸る。通りは決勝點から歸りの見物人で一杯。而も皆スキーをはいて居るのだから混雑だ。併し今日はよごれたスキー服や、水色の軍服さては胸に刺繍をした瑞西のコステュームの天下だ。眞赤なバーベリーの防水服なんかは、スケートリンクに追込まれてしまつて居るのだ

四

午後は愈々シブルングラウフの競争。新しく造られた、テイトウリスシャンツェは朝の内にすつかり新雪を踏みかためてバーンが用意怠りなく出来て居る。シャンツェの下には例の如く赤地に白十字の國旗がはつてある。アウフシブルンバーンの兩側には一米毎に札が立つて居るし、アウフラウフは垣でかこまれて居る。下から見上げた所全くすつきりとして居て美しい。特に兩側の青い針葉樹の森と眞白なバーンとシャンツェの下の赤い旗との調和が馬鹿にいゝ。

競技は一時半から始つた。第一が大人の三組、第一組は十八歳以上三十二歳以下の選手で既に、瑞西大會、又は其

に相當する外國の競技會で賞品を得た者ばかりの組で参加者三十一人。云はゞ一番より抜きの組である。第二組は三十二歳以上の選手の組で参加者五人。第三は第一組と同じ年齢で、未だ賞品を獲得した事のない者、参加者三十三人。少年組は十六歳以上十八歳以下の選手で参加者八人。

胸につけられた番號の順にメガホン掛が名を呼ぶ。すると、審判官がバーンを見とどけて、何も故障がなければ、「バーン・フライ」と合圖する。シャンツェの兩側の二人のスターターが紫の旗を一振振つて下ろすと森の中に隠れた、アンラウフバーンの奥の方からシプリンガーが突貫して來てヒューツとウナリ乍らシャンツェを離れて宙を飛んで行く。急なアウフシブルングバーンの兩側にはびつしり熱心な見物人がたかつて居て、無事に倒れずに下りるゝ聲を合せて「ブラボー」つて怒鳴るのだ。何の事はない見物人も半分は自分自身が飛んでる様な氣分になつて居る。だから折角「ブラボー」つて怒鳴つたのに、間もなくバーンの下の方で轉つたりすると、わが事の様には嘆息するのだ。距離はバーンの兩側に配られて居る長い棒を持つた十人ばかりの助手と一人の主任とが居て、その棒で飛下りた場所と距離を示した札を結びつけて、その都度正確に測られる。そして一人の専門家が他所の聲を張上げて本當の獨逸語で其を審判官に報告する。同時に數字が掲示板に大き

く出る。バーンの下の方の連中は其を見て、数字が大きければ大きい程、盛な拍手を以てアウスラウフに滑り終つた選手を歓迎するのだ。丁度花道に歸つて行く勝相撲に拍手を送る様に。

成年組の第一位はきわだつて立派に飛んだ。ノールウエーのシトレムシタットは最初から四十一米突を立派に飛んで皆を驚嘆させた。併し二回目には四十米突を突破する記録が續々出る、三回目には五十米突以上の記録が十幾つも出た。五十九米突と云ふ恐るべきものが二つもあつたけれども、惜しい事に、二人とも倒れてしまつた。成年組の第一第二、第三の三組、と少年組とが順々に三回飛び終つたのが四時半過ぎでもあつたらうか。下の方の平地はいざ知らず森に囲まれたバーンの側に立つて見て居る者の寒い事と云つたらない。其に急な傾面の事故足場はひどく悪い上に、時々木梢に積つた新雪が思ひ出した様に雪崩れて來ては、襟首から入つて來る。併し見物は皆ムキだから雪を浴びたまゝ、眼を皿の様にしてシャンツェの上に現はれる選手を待ちかまへて居る。何れ自分のクラブ、クラブの選手を心の中で應援して居るのだらう。そして「バーンをならせ」と命令されば唯々諾々として兩側から出て來てたゞく。何も特別の掛がある譯ではなく、其がバーンの兩側の見物人の當然の仕事なのだ。兵隊も居れば、髯面の老人も

居る。村の子供も出れば女も出る。要するにスキーをはいて立つて居る者が皆な出て來て、バタ／＼やるのだから早い。誠に其は見る物に心床しく思はれる光景であつた。

最後に負借しみの強い、ヴェンゲンのラウエナーが番外として五十五米を立派に飛んで大會は終つた。ラウエナーは、最初に三十一米云ふ記録で倒れてしまつたのだ。

五

私は居心地の悪いグランドホテルにもう一晚泊るのをやめてその晩すぐエンゲルベルグを後にした。一晚ルツェルンに泊つて翌日汽車に乗ると、居る／＼グリンデルヴァルド、ベルン、カンドルシテック等の選手の同勢が十人余り居る。勿論ブラバンドもその一人。グリンデルヴァルドの連中は距離は皆少ない方であつたけれども、結果に於て、カウフマンが三等、ブラバンドが七等で賞に入つて居る。ブラバンドは型の方では最高點を占めて居る。尤も當人はあんな不成績は初めてだとふさいで居た。

汽車がルツェルンを出るとカウフマン・フリッツのリュックザックの中から大きな手風琴が二つ出て來た。凡そあの位かさばる物はないと思はれるその手風琴を二つ、エンゲルベルグ三界まで擔いで行つたとは驚がせる。そして其

を代る／＼引きりなしに鳴らして行くのだが愉快だ。まるで一汽車占領した様な気分になつて、歌ふ、靴で床をならす。全く賑やかな旅をし乍ら私達はグリンデルヴァルドに歸つた。

發表された記録によるミクスタード、スキー、クラブ所屬のノールウエー人、シトレムシタットが最距離の方で一着、同じくシブルングの方で一、六九九點で一等、其で前者の得點一を合せて二で割つた結果、一・三四四三云ふ非常な好成绩でもつて一九二五年度の瑞西スキー選手權を獲得する事になつた。

同じ、シトレムシタットは二月二十二日のポントレージナ競技會で開會の前の練習の時に五十九米突と云ふ恐るべき記録を出し居る。其は去年のシャモニー大會に於ける同じノールウエー人タムスの記録の五十七・五米を越える事一。五米突に及んで居る。大体に於て、此のポントレージナの會では皆素晴らしい記録を出して居る。もう其はシブリンゲン（跳躍）ではない、其は言葉通りフリーゲン（飛行）だつた」と「シボルト」紙は報じて居る。惜しい事にシトレムシタットは負傷して三回目に棄權し、ラウエナーが一等を占めた。ラウエナーは、併し、自分の最長記録が五十四・五米突であるのに、ポントレージナのフライマンが五十五米突飛んで居るもので例の如く負じ魂を出して、番外

に二度も飛んで五六米突云ふ所で辛じて溜飲を下けて居る。此の番外の時には六〇米突六一米突と云ふ大物が實際、高く飛んで行つてしまつて、何時おちて来るのか見當がつかない程だつたと大袈裟な事を書かれる程其は猛烈に「飛行」したにも拘らず、惜しい哉着陸後間もなく倒れてしまつた。

二月八日に開かれた獨逸競技會に於ける最長不倒記録が四九米、二月十五日に行はれたチエコスロヴァキアのヨハニスバードで開かれた中歐大會は天氣の狀態がひどく悪くて最長不倒の記録が四五米であつたと云ふ事を考へればエングルベルに於ける、最長最上不倒記録五三米、や、此のポントレージナに於ける諸記録は遙かに優秀だ云はなければならぬ。併し一方、競争がはげしくなつて、六十米七十米等と飛ぶ様になつて行く内に其が余りに専門化してしまひ、同時に距離の争ひに墮してしまつて、しまひには胴の周りにゴムのたがをはめないと内臓を損傷する云ふ様な事になつて、スポーツたるの本來の意味を離れてしまひはすまいかと云ふ憂ひを抱きつゝある人々もある。誠に尤もな事だと思ふ。

併し何れにしても素晴らしい物だと感心せざるを得ない。

三月三日

グリンデルヴァルドにて

山 詩 抄

加 納 一 郎

折ふしわが拙き筆にうつしたる、山と雪との世界を歌へる詩章のいくつかを、ノートより。

山 の 夜

遠き雪原より白銀を輝さして
静かなる星づく夜、くまなく
冴えし光の中に、寂しさに打ち
ふるへつゝ、山の歌の調きこゆる。

ゲオルグ・ハールマン

冬 の 朝 の 日

鋼鐵の堅きに似たる冬の夜。

柔かき雪を、うるはしく
おへる樹々の
深き夢路やいかに。

森のくほみを流るる小川
かつて快き曲を唱ひしも
いまは歌ふをやめて
静かにも水は凍れり。

あかつきのおぐらき闇に
雲間より
勝利の強き力漏れ

朝の光のみちて射しこむ。

小さき樹 一つ

始めの光に照らされて輝けば

やがて世界は 純粹の

金剛石に輝きわたる。

フリツ、・レツフル

峯に立ちて

峯に立ちて

世を眺めたることなきは

神の造り給ひし世の

いかに美しきかをば更に知らず。

フランツ・レーグワルト

山の春

静かなる山稜たかく

柔かき、美しの水蒸氣漾ふ。

森には雪なほ深けれど

山懐に、春の氣馨る。

朝日に照れる岩壁の

割目に秘やかに草の窺へるあり。

峯のあたりの青めることよ。

岩間に滴り忍べることよ。

ねむれる椈の樹あるを見よ。

そは風に搖ぎつ、芽をいだし、露を宿せり。

鳥はいで飛び交ひ

自らの甘き聲に驚けり。

数々の小花は、いま夢より醒めたるごとく

「彼等は生けり。彼等は生けり」てふ

静かなる悦びの聲を上げる

自然の中に、うれしげに打ちふるえり。

カール・ステイレル

静かなる山

静かなる山の雪に

夕霧のたちこめて

遠きより鐘の音は、山湖をこえて

なつかしく響き來て、消え行く。

わが前の至てはうすれゆきて
あゝ、われは孤獨を覺ゆ。
空は 黄金の星の光を
われにそよぐ。

マルチン・グライフ

漂泊心

漂泊心ほど、胸をたかむるものはない。
冒險ほど、強く血をわかすものはない。
萬年雪と岩とほど、頭を透徹にするものはない。

出で、登れよ。
勇敢の進路を
眞摯と諧謔のなかを

快樂と悲哀のなかを
戦ミ遊戯のなかを
高きへ。目標へ！

カール・レーリツヒ

静けさ

静けさこそ大ききそして寂しさを心あてに
山にわけ入る美しき 漂泊の旅！
こゝに純なる祝福の自由と、神の静かなる存在の
たゞよふを覺ゆ
そこに足は自ら歩をはこび
蠱惑せられたるがごとく峯を凝視め
巨岩に直面して
大いなる強きとを示すところの一切を惟ふ。

若き理想はかつて愛と譽に
かくばかり崇くほがらかに向ひたりき。
されど熱き白日の下には
はじめかく性急に進みし足も
如何に遅々として運べることよ。
路は遙けく、幾度か谷に夜を送りて未だ高きに入るを
得ず
しかも幾千の高き峯は、そこ、時余の地に、掴み得る
がごとく近く横はりてあり。

パウル・ヘーゼ

山と日常生活

伊藤秀五郎

土——自然 近頃漸く僕の心の中に、土——自然——に對する新しい親密の感情が湧いて來たことを感ずる。かつて、土に飽いては雪を求め、雪に飽いては氷を求めるといふ様な心持ばかりで満されてゐた時分もあつたが、それは大いなる誤であつた。僕等はこのコンクリートで固められた都會の塵埃をこそいとへ、どうしてこの自然を形造る土をば棄てられよう。汎て雪も氷も岩も均しくこの土の被覆物に過ぎないのだ。土こそはこの偉大なる自然の本性であるのだ。

この様な、土に對する激しい親密の感情が湧いて來る様になつてから、北海道の山々が殊更に親しみをもつて眺められる様になつた。若し山のもつ價值といふ様なことが言はれ得るとしたら、さまよひ歩く人々にとつては、北海道の山々は實に大きな魅力(價值)をもつてゐるであらう。北

海道は山ばかりではない。未だ人工の加へられてない、文明化しない自然ならば、四圍の状態は様々に異つてゐるやうとも、皆それぞれ趣はある筈だ。大和路や四國の奥まつた土地もいゝと聞いてゐる。僕が今迄歩いたうちでは、秩父と奥上州とが、土に親しむといふ様な心持には一番びつたりくる様だ。そして剣や穂高の様な岩山へ、クレツテライを目的として行く時でも、意識的にしろ無意識的にしろ土に親しむといふ感情が動いてゐるに相違ない。それでなければ(より大いなる試みにまで進む準備としての外は)都會の眞中に、人工的に建造された岩塊に、ピツケルやザイルやナーゲルシューを以て、激しい緊張を求めると何んの異るところもなくはないだらうか。

餘りに恵まれ過ぎてゐる 山黨にとつては北海道は

少し雪に恵まれ過ぎてはしないか?。その邊の丘陵地にも到る處立派な斜面と處女雪を求め得る。そしてそこいらを滑り廻つてゐることだけで、十分に愉快な一冬を過し得る。そしてまた少し高い山へ行けば、常に、殆んど變化のない粉雪である。夏はひどいブツシュで、少しも顧られない様な山さへ、冬は實にシローイフェルの心を捕へるに十分な姿に變つて了ふ。たゞ滑降の愉快さを享樂する爲のみに、充分登る價值があるんだ。こんな環境に孕まれた人達は、勢ひスキーを對稱としての山ばかりを考へる様になり勝だ。そういふ人達はすぐ、スロープに目をつける。愉快な滑降の出来ない山には少しも興味を引かれなくなつて了ふ。そうなると山は、高さが高く、範圍の廣い一つのスキー場に異ならない。僕はそればかりで満足してゐる様な人達をも決して輕蔑する心はない。その人達はその人達の世界を十分にひらいてゐる。けれどもその様な意味をもつ山は、實に「山」としての極めて僅かな一面に過ぎないので、そして卒直にいふならば、それは僕の心にとつては、極めて淺い交渉をもつばかりだ。山のもつ全体はそんな狭く小さなものではない。僕と直接に大きな交渉をもち、僕に大きな影響を與へる山は、山の他の多くの部分に於てである。「ザイルとピツケルとアイゼンとを以て、一步一步靜かに自分の地歩を固めてゆくと、山の他の一面がぢりぢりと

吾等にせまつてくるではないか。」

勿論僕は山のさういふ一面ばかりを目指してゐるのではないが、とまれ山に對する僕の意志と感情とは、これと同じ意志と感情とを有する人にのみ、よく理解され得るのである。それ故に、かつてこれらの理解を他に求め様としたのは、まことに徒爾なこゝなのであつた。たゞ自分と同じ感情をもつ山友達の多くを、僕の直ぐ近くに見出し得ないことを寥しく思つてゐる。

又　スキーを對稱としての山のみを目指す人達は、何はさておき滑り心地のいゝスキーを求めることになる。そしてビインドウングやワツクスの研究が必要になつてくる勿論、スキーをかく以上、それらの研究を怠つてよいといふ理由は少しもない。けれども僕等にとつては、蠟の種類よりもザイルの使ひ方が先だ。スキーの長短を論ずるよりはピツケルの善悪の方が大切だ。なる程北海道の山ではシエックのピツケルは或は必要でないかもしれない。然しそんなことは坊主山で丸く治つてゐる弱虫の泣言だ。アルペンやヒマラヤとに少しでも心を引かれる者ならいつまでも岩や氷から遠ざかつてゐられるものではない。アルペンやヒマラヤはなくても、少しでもより大きな試みにまで進まうとするならば、安閑と人前に美技を誇つてなどはゐられ

ない。設備の完全した登山小屋がないからといつて、造材小屋なんかを唯一の頼りとしてゐた時代は、とうの昔に過ぎ去つた。天幕やシュラーフザツクは何の爲に出来てゐるのだ。これからは雪の中の野營がもつと研究されなければならぬ。蠟やビンドウングの研究は他にその人がある。僕等は黒金のピツケルを氷雪の尾根に振はう。塵にまみれて、室の片隅に忘れられてゐては、シエンクのピツケルも泣き出さうぢやないか。板さんもいつてゐる、「吹くなら蒼氷の上で吹いてもらひませう。えばるなら、吹雪の中でえばつてもらひませう。リリエン黨の誇は、廣い斜面に描くスラロームの雄大であり、重いリュツクを脊負つて、岩と氷の間を、豆の様に小さくなつてゆく姿である。」

何を求める 僕は今、このすつかり雪に埋れて了つた造材小屋の前に、快いしばらくの休憩をとつてゐる異つた二つのグルツペを見る。その一つといふのは、誰もが一樣にマイスター服にモノグラムを着けてゐる。彼等の脊負ふ大きなリュツクの中には、ズツペやケーゼやウルストやマルメラードなどのバタ臭い食料がうんと詰つてゐるんだ。その中には、昨夜この峯近くで野營した連中も交つてゐるんだ。そしてシャベルや天幕やシュラーフザツク等がリュツクの嵩を尙更大きくしてゐるのだ。どうみても彼等は感

じのいいシローイフアーだ。それに比して他のグルツペの人達の服装の見窄しさ。彼等の亞麻の上服は多く擦れ切れてリュツクなんでも頗る貧弱だ。恐らく彼等のリュツクの中には、僅かばかりのパンと握り飯とより外は入つてゐないだらう。そして彼等の中の多くは地圖も磁石も持たないんだらう。そして或る時には、思ひがけない雪庇や崖やひどいブツシュに突當つて、はたぎ當惑する事もままあるのだらう。不注意が彼等をして谷深く用意なき一夜を苦しめる事もあるだらう。なる程彼等の多くは一つの斜面を上るにも余り考へる事はない。だから彼等の刻むジツクザツクは或は急過ぎたり、或は勞力の徒費をも顧ずにツレツペンばかりを續けることもしばしばあるのだ。彼等は恐らく一人もバイフエを持つてゐないだらう。彼等がある人達から輕蔑されるのも當然なんだ。そして僕も嘗ては、その様な人達を極めてさげすんだ一人なのだ。けれどもそれは甚だ誤つた偏見であつた。

彼等は何を求めて山へ行くのであるか。この間に對する答は極めて明白ぢやないか。すなはち山へ行きたいから行くといふばかりなんだ。彼等はその外に何も考へはしない山を想ふ純情のものには何の區別もありやう筈はない。彼等こそはほんとうに山を知る人達であるのかも知れない。彼等はただ山に登り、澤を彷徨へばそれでいいのだ。恐ら

く彼等は、彼が歩いた足跡を何か紙にでも書き残さうなどいふ事は毛頭考へてはゐないだらう。自分達が何處を歩かうと何んな峰の頂を極めやうと、それを他人に誇らうとする様な事はないだらう。彼等はシエンクのピツケルが何處で打たれるかも、どれがミツチのザイルで、どれが英國山岳會證明付のそれであるかも知らないかもしれない。而し彼等はいつも山の事を忘れた事はないんだ。僅か一〇〇〇米突の山は或る人達にはただ單なる丘陵であるかもしれない。而しその小さな山に於てさへ、彼等はどんなにか大きな喜びを見出してゐる事だらう。そしてそれらの小さな山を歩き廻る事がより大なる山への試みの確實な歩みの一歩であるかもしれないのだ。

さて、ここに於て僕は自ら深く省察すべきよき機會を見出した。僕の内なるものが如何に微小貧寒なるかを、人ごとではない)

僕は敢ていま一度反問する、彼等(又我等)は何を求めて山へ行くのであるか。

手稻山 恰も、ある歌人が常に眺め暮した一つの山を幾様にも歌つてゐる様に、あの北から南へ走る一脈の手稻連山は、我々札幌人にとつては、まことに親しいものになつて了つてゐる。若しもこの茫々たる石狩原野の真中に建

設せられた札幌から、この山々を取り去つて了ふのならば札幌人はどんなにか寂しい感じを懐くだらう。街はたゞ碁盤の目の様に四角形に形付けられ、坂一つさへ持たない札幌のまちに手稻の山脈は一つの清新な氣分を與へてゐる。殊に横濱の様な坂の多い、そして街の中心を少し離れると、ほんとうに變化に富んだ丘陵が散在する都會に育つた私には手稻山はなくてはならない存在物の一つなのである。

手稻山は一年中何時行つてもいゝ山だ。淺黄色の若葉が燃ゆる春、山がすつかり濃い緑で被はれて了ふ夏、紅葉が香り、落葉が揺めく初秋から晩秋、そして美しい樹木の咲く嚴冬、何れもその時どきの趣があつて面白い。

輕川温泉から頂上までは尾根傳ひに細い路がついてゐる而しこれは單調で變化に乏しい。僕達がいつも登る路は輕川驛前の往還から、錢函澤に沿つて數町行つてから、四〇六米突(こゝを私達は千尺高地といつてゐる)の高臺に續く尾根の小徑をゆくののである。夏でも冬でもこゝまでに一汗かいて了ふ一番苦しい一時間である。しかしこゝに立つた時の氣持は僕は大好きだ。一面に緑の草地に陽炎のたつ時でも、矮小な熊笹にすつかり蒸されて了つた胸に、やつと冷い海氣を快く入れる時だも、コクワや山葡萄を血眼になつて探し廻つた疲れた脚を、黄ばんだ柔い草原に投げ出す時でも、遠く低く煙つてゐる赤黒い都會の雰圍氣を眺める

時、僕等の心を一つの快適が帆走するのだ。見給へ、長い
一道のレールの上を、蜈蚣の様な列車が走つてゆくではな
いか。こゝで燻らす紫の煙と共に、僕等の心の中にあるい
やな濕潤な陰は忽ち何處かへ吹き飛ばされていつて了ふ。

再び小徑を辿つて、五〇〇の臺地を過ぎて、少しの間平
地をゆくと、巾一間位の刈分がこの路と十文字に通つて
る。それを左の方へ數町ゆくと、無線電信所の方へ流れて
行つてゐる小澤の上の方へ出る。この澤を左へ左へと登り
つめて、水が切れてから一寸の間笹を分けると温泉からの
尾根路にぶつかる。こゝから頂上までは約三十分で、稍々
急な所謂圓子坂一つをこえれば、一面に熊笹の茂つた平地
に出る。崩れ落ちた三角點の柱が數町先に僅か姿を現はし
てゐる。頂の北側にはハヒ松が少しばかり、南側は急な崖
だから近寄れない。

手稲山をたゞ遠くからばかり眺めて不恰好な笹山と思ふ
と大間違ひだ。春、峯の日蔭にはまだちよいちよい雪が残
つてゐる時分には、オホバナエンレイサウ、シラネアホヒ
エゾノリュウキンカ、サンカヨウ、サクラサウモドキ、初
夏にはミヤマオダマキ、イハウメ、コケモモ、エゾコザク
ラ、秋にはエゾトリカブトなんかといふ、東京あたりでは
いくら騒いだつて手に入れない綺麗な高山植物が、靜
かに蕾を開いてゐる。そして千尺高地を越えて了へば、素

性のいゝ白樺の林が、朝霧に煙つたり、日光に輝いたり、
夕靄に浮んだり、思ひの儘だ。始めて上州の赤城に登つて
道から離れた白樺の皮を二三枚、丁寧にノートに挟んで持
つて歸つた時分には、見様も思へば毎日でも樺の林を見ら
れる様な都會がある事は知らなかつた。

もし又土曜あたりから、天幕でも持つて泊りに行くな
ら澤には入る少し手前の朴の木あたりがいゝ。身の丈に餘
る熊笹を切つて敷けば申し分のない寢床が出来ると、水に
近く薪に不自由を感じることもなく、笹の波が月の光で銀色
に輝いてゐる夜などは、思はず夜の更けるのも知らずに語
り明して了ふ。

冬野營するなら、ネオバラか夏の澤の入口あたりがいゝ
針葉樹の下を少しほれば、直接の風には當らなくてすむ。
土曜午後から行つて丁度いゝ。そうすると翌日の日曜の朝
は早くから頂上に立てるわけだし、ネオバラでも飽きる程
すべれる。

仲間について

此度の黒岳行については、僕等は死
んでも小屋へ潜り込まなけりやならないといふ意地があつ
た。それでなければ僕は、黒岳の山頂にたつた時、あの様
な烈しい嗚咽の感情は経験しなかつたであらう。僕等は勿
論無理はしなかつた、しかしどうしても行かなければとい

ふ感情がかなり濃く僕の心を染めてゐたのは事實なのだ。そしてその様な他に對する意地といふ様なことは、山には全く禁物なのではあるが、それにはどうしてもさういふ感情を押へきれなかつた十分な理由があつたのだ。

僕等はいつだつて、フアースト、クライミングといふ名前を欲して新しい試みに進むんぢやない。此度だつてさうだ。そんな名前なんかよりは、山を靜かに味ふ方がよつほど僕等には大切なんだ。同じく山へ行く者だ。誰が先にならうとお互にその成功を喜ぶべきぢやないか。若したゞフアースト・クライミングといふ名前ばかり欲しい人があるならば、そんな人には勝手に先にやらしておいて、僕等は後からゆつくりやつていけばいゝぢやあないか。此度は偶然僕等がその様な名を得べき立場になつたけれども、それよりは、烈しい吹雪の一週間を、ちつこ小屋の中で天氣を待ちこたへたことの方がすつと僕等にはうれしいんだ。

これまで、僕等の仲間いつも近くの人達に依て悪くいはれてゐた。それもたゞ外面的の例へば單なる登山の記録ミカ、スキートのテクニークのみを根據としての批難で、内的な、グルツベのむうどとか精神とかには少しも觸れたものではなかつたのだ。勿論僕等はそんな理由の薄弱な非難を恐れはしない。又そんな非難に對してさへ、僕自身の、又僕等グルツベの反省の機會を與へられたことを喜んでゐる

位だ。

それでもよく考へてみるがいゝ。山に對して果してどれだけの理解があるかも疑はしい人達に依て、而も殆んど取るに足りない様な理由の下に、極めていゝやな態度をもつて仲間が批難をされた時、誰だつて不快な感情を味はふぢやないか。温厚な君子でない限り、誰だつて多少怒りに似た感情も起らうぢやないか。そしてそこに、その人達に對する意地といふ様なものも出来て了ふのだ。

如何に僕等が微小貧寒なるかは、僕等自身よく知つてゐる筈だ。だからこそ僕等はいつも忘れたつもりは少しもない。僕等の生活から、山といふものをとり離して考へることは出来ない程、それ程に山といふものは僕等にまつて親しいものになつてゐるんだ。小さいながらも、いつもアルペンやヒマラヤのことなど想つてゐる者だ。そして僕等はお互に懈怠と安逸を戒しめ合つてゐるつもりだ。僕等はもうそんな人達の言葉にかゝはつてゐるのはよさう、そんな人達の批難をまで心にかけてゐる必要は少しもありはしない。山頂までスキーを用ひられる登山以外に、少しも心を引かれない様な人達の、或は單に山岳滑走家をもつて満足してゐる様な人達の言葉にまで。そして又自らは山への熱心なる意欲もなく、山へ行くべく常に準備されたる躰をも持たずに、たゞ自ら鼻のみ高くして、徒らに舊い記録

を唯一の寶として大切がつてゐる様な人にまで、僕らはもはやとや角いはれてゐることはないんだ。僕等は黙つて、僕等の進むべき道に精進すればいいではないか。

僕等の仲間の均しく尊敬する山男は、あの温厚な、そしてイギリス風の高尚にゲルトンの澁さとラテンの明るさをもつた「山行」の著者ミ逝つた板さんとであつた。そして僕を直接教へ導いてくれたのも「山行」と「板さん」と外國の高名な二三の登山家の著書ミ、そして僕の敬愛するあるゲルツベの人達の書いたものである。

附記 此等の断片的な文章は、最後の「仲間について」と「手稻山」を除くの外、況て日記の形に依て書き残された僕等のゲルツベへの單なる希望であり、併せて僕の山に對する考へをいつています。故に何等統一あるものではありません。僕は僕の内なるものが如何に貧寒なるかを自ら悟る故に、また外に對して求むることも大きいです。僕は、僕等山仲間が、單なる山へ行く爲の友達であることに満足出来ません。お互の内的生活に交渉をもつた、まことの心の友でありたいのです。

彙報抄録

アンドリュー・アーヴ
インのこゝろ

昨年六月八日エヴェレストのアクシデントに就ては本誌第四十二號に松方君が概説せられたところである。アーヴインのこともそのとき記されてはゐるが、氏のスキーに就てこゝに附け加へよう。

實に彼はエヴェレスト探檢に出發する、直ぐ前のシーズン即ち一九二三年のクリスマス前から、一九二四年一月中ばにかけて三週間スウイスのミュルレンでスキーを練習したのだつた。彼はそれよりまた一九二三年スピツベルグンの探檢のときに一寸スキーを穿いたことがあるのだが、それは平地を歩いたり、ごくゆるい斜面を滑つてゐたにすぎないので、ミュルレンで初めて正式にラン氏に就いて教はつたのだ。それで第一日目に一寸練習したゞけで、クリスチヤニアとステムターンをやる様になり、ダウンヒルのテレマーカーそれは初心者にはほえ易いステップ、テレマ

ークではあつたが——さへも試むる様になつた。で二三日してかう初歩のテスト(イギリスのクラブではランナーのクラスをテストによつて定める)を受け、他の連中が五分もかゝつたのに彼は三〇秒で降つた。彼は堅い雪ではさううまくはなかつたが、軟かい雪では一〇シーズンもスキーをやつた人の様な確實さで滑る。間もなく彼は二級の試験を通つた。元來彼はヒマラヤに行くのでもあるし山地スキーに志してゐたのであるが、その基礎として此等の練習を熱心によつたのである。以上の有様で彼が如何に、をそるるこゝろなく、強健な、そして天才的スポーツマンであつたかを知ることが出来る。若し彼が生きてゐたら、次のシーズンにはイギリスチーム對スウイス大學チームとの競技に選ばれたであらふと云ふことである。

また一面から彼がスキーをやるこゝろは、イギリスのスキランナーとアルピニストの間をよりよく融和し、接近せしむるであらうと大なる期待をもたれてゐた。此の意味に於ても彼の死はスキー界に悲しまれてゐる。

「マロリーの行く程のところには、彼もまたついて行けるだろふ。」と云ふ程の信用を彼はもつてゐた。若年二十二彼がエヴェレストの死は、稀に悲壯な、ロアンティックな出來事である。(かの生)

レルヒ氏の消息

日本に初めて、リエンフェルデル式のスキー術をもたらしたところの有名なりテオドル、フオン、レルヒ氏は戦後、ウイーンで貿易商を営むでるが、頃日、書を寄せて、アオタモ材輸入希望の趣を傳へて來た。書中嘗て旭川其他の地にてスキーをコーチせること、ウイーン日本大使館にて日本にをいてスキーが大いに弘められたと聞いて非常に嬉んでゐることなきを記してゐる。氏は現在 IV Vohlleben-Gasse 18, Vienna, Austria, にある。

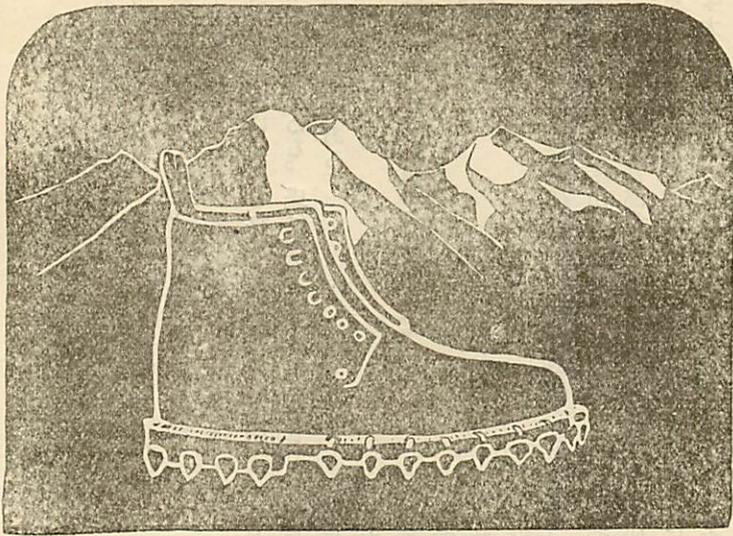
全日本スキー聯盟會長の決定

二月大鰐に於て内定せる會長候補者につき常務委員に於て交渉中のところ、今回愈男爵稻田昌植氏就任快諾せられることになつた。氏は大日本体育協會のスキー部設立界當時より全日本スキー選手権大會其他本邦スキーの近年の發展、進歩の爲に多大の努力を拂はれたのであつて、今度の聯盟の成立についても、一に氏の甚大なる庇護によるものと云ふべく、氏の會長就任は此の改造せられたる日本のス

キー界の將來の爲に洵によるこばしいことである。

改造せられたる大日本 体育協會こそスキー聯盟 の加入

長らく問題であつた大日本体育協會も最近各種運動競技團體の諒解によりて改造せられることになつた。新しい體協は基金十萬圓の財團法人として、その組織は既に傳へられた如く、各種運動競技に關する全國的團體と、別に一時金百圓又は年額十二圓以上を出資する賛助會員とより成り前者は各團體より二名の理事を、後者は評議員若干名を選び此の中より互選にて、團體より選ばるゝ理事數の三分の一以内の理事を選出し、理事の互選により會長を定むるので、此の他に評議員會は監事二名を互選し、又、會務處理につき主事を置く組織で役員任期は會長、主事は四年その他は二年と云ふことになつてゐる。この新組織の成立と共に加盟する競技團體は、目下全日本陸上競技聯盟、大日本水上競技聯盟、日本庭球協會、日本漕艇會、大日本ホッケー協會、大日本蹴球協會、全日本スキー聯盟である。



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石話電

番七二一六京東替振

山とスキー第四年目次

(自一九二四年六月第三八號
至一九二五年五月第四九號)

論 說

山への想片……………	大島亮吉……………(四〇二)
氣象學術語に就ての疑問……………	六鹿一彦……………(一〇七)
もう少し寒ければ彼は凍死をしなかつたであらう……………	加納一郎……………(二七五)
スキージャンピングのスタイル、ジャツヂに關する私見……………	廣田戸七郎……………(三〇〇)
再び冬季登山とスキー登山の定義に就て……………	大島亮吉……………(三六)

登山及スキーの研究

夏期野營に關する二三の注意……………	田口鎮雄……………(一〇〇)
山地に於ける方向決定の方法……………	板本丁次譯……………(四)
各種ビンダウンの得失に就て……………	仙波正雄……………(一九七)
スキーの長さ及び幅……………	岡村源太郎……………(三八)

スキー術

ステムターンに就ての考察……………	中野誠一……………(一四)
-------------------	---------------

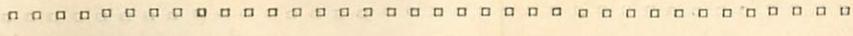
山地に於けるスキーの實際……………加納 一郎……(三三)(三九)(三六)
 平地滑走に就て……………岡村 源太郎……(九)
 スキージャンピングのスタイル……………ワップライシ、カルルセシ廣田 戸七郎譯述……(三四)
 ターンを支配する素因に就ての概念……………中野 誠 一……(六四)

山岳各記

蘆 別 岳……………岩 森 秀 夫……(三四)
 五月の奥山盆地……………蒔江永次……(四九)(二八)(六六)
 船形山より泉岳へ……………額 田 敏……(六)
 東北の山々……………藤 瀬 新一郎……(六)
 平原の上に聳ゆる山……………大 島 亮 吉……(三三)
 元旦の上岳……………山 口 季 次郎……(三五)
 第三回エヴェレスト登攀抄録……………松 方 三 郎 譯……(七)
 一九二二年エヴェレスト第三回登攀抄録……………赤 松 勳 譯……(三八)
 三月の黒岳登山小屋日記……………伊 藤 秀 五 郎……(四八)

山岳文苑

詩……………(三三)(三七)(四六)(一七)(四九)(八五)



山上の思索……………(一)

山に寄する……………(元)

ベルグシユタイガーの日記より……………大島亮吉譯……………(五)

山想斷章……………加納一郎……………(五)

記念として……………大島亮吉譯……………(六)

譯章……………(六)

譯章……………(七)

拔章……………(八)

譯章……………(九)

Skinncht……………ハンス・モルゲンターレル……………(四三)

山詩抄……………加納一郎……………(四八)

雜 錄

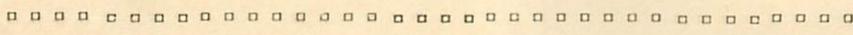
彙報抄錄……………(七)(三)(四六)(四〇)(三五)(三六七)(四〇)

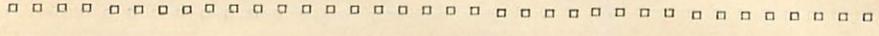
春の中山ゴシツブ……………君一……………生……………(五)

北海道スキー登山史……………加納一郎……………(六)

雪草紙……………ホースケニーゲル……………(一一)

オスロとクリスチヤニヤ……………君一……………生……………(二〇)





平藏の語	マリストヘンゲル	(三七)
杖術の進歩と体力	岡村源太郎	(三三)
夏街所感	まか	生 (三元)
国際スキー聯盟規約		(三四)
原人禮讚	冷二	生 (一七)
スキー材製作報告	加納一郎	(二六)
登山者の衛生	山口壽一	譯 (二六)
スキー地としての北海道	加納一郎	(三元)
スキーに關する参考書		(二五)
所謂バンデミー	君一	生 (二五)
道ミ道伴れ	ヘンクロー・ヘク	譯 (二八)
スキーの驚異第二編に就て	岡村源太郎	(二九)
峠	大島亮吉	(三〇)
コラー先生を憶ふ	中野誠一	(三五)
故藤江永次君登山履歴		(三七)
逝ける友	加納一郎	譯 (三七)
「藤江」	別所安次郎	(三六)
思ひ出	伊藤秀五郎	(三七)



第三回全日本スキー選手権大會感想……………	廣田村源七郎……………	(三八)
瑞西便り……………	松方三郎……………	(四二)
山と日常生活……………	伊藤秀五郎……………	(四七)
寫 眞 版		

針 葉 樹……………	N	生……………	(一)
東面より見たる蘆別岳……………	N	生……………	(七)
五月の旭岳……………	藤江永次……………		(元)
雪上の野營……………	同……………		(五)
憩……………	同……………		(八)
ヌタツパンベツより見たる石狩岳……………	同……………		(一三)
上の岳より黒部五郎を望む……………	山口季次郎……………		(一五)
五月のヌタツパンベツ……………	藤江永次……………		(一六)
ジャンピングターン……………	長谷川 敦……………		(一八)
クリスチャニヤ……………	同……………		(一九)
中 山 峠……………	成瀬岩雄……………		(四九)
奥手稻山附近……………	同……………		(四九)
蘆 別 岳……………	同……………		(五)

豫告

六月號休刊

第五十號記念倍大號發刊につき六月號を臨時休刊いたします。

尙本號は第四年目最終號に當りますので總目錄を附しました。合本なさる方の御便宜かと思ひます。

定價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

大正十四年四月三十日印刷

大正十四年五月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯兼印刷者 佐々木政吉

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山ノスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo

No 49. Aprmjoilo. 1925. Sapporo. Japanujo.

美 滿 津 ノ
ウ井ンター・スポーツ
各 種 用 具



合 名 會 社

美 滿 津 商 店

東 京・本 郷・赤 門 前

大大大
正正正

定 價 金 參 拾 錢